

岡山大学文学部

FACULTY OF LETTERS

OKAYAMA UNIVERSITY

外部評価報告書：1999

2000年1月

はじめに

本学部は、1999年10月から11月にかけて教育研究にたいする外部評価を受けました。本書は、その経過と評価内容および評価にたいする学部の対応をとりまとめた報告書です。

外部評価は、本学部では初めての試みでした。学部を外から率直に点検・評価していただくことにより、日々の教育研究のあり方を反省するとともに、新しい方向への改革の一つの指針にさせていただきたいという強い願いがあったわけです。外部評価の前提として、まず1999年9月までに自己評価報告書を作成しました。その他資料も事前にお送りしたうえで外部評価委員の先生方をお迎えすることとなったのですが、準備に十分な時間をとることができなかったにもかかわらず、無事に点検・評価をすすめることができましたのは、ひとえに評価委員諸先生のご寛容の賜でありました。わたくしどもの意をくんで評価委員をころよくお引き受けくださった眞方忠道神戸大学文学部教授（前文学部長）、吉田民人中央大学文学部教授（元東京大学文学部長）、森 正夫愛知県立大学長（元名古屋大学文学部長）、中野三敏福岡大学教授（元九州大学文学部長）、戸田吉信東亜大学大学院教授（元広島大学総合科学部長）の諸先生に、あらためて厚くお礼をもうしあげます。

今回の外部評価は、基本的に学科を単位として実施する方針をとりました。評価委員には、担当学科の教官・院生・学生とも膝をまじえてお話しいただき、教育研究の実状を現場レベルでくわしく点検していただくようお願いしました。諸先生には大きなご負担をおかけすることになりましたが、それぞれの学問分野で指導的な役割を果たし大学運営にも経験豊かな先生方にしたしく接するとともに、懇切なご指導と有益なご示唆を多く得ることができましたことは、わたくしたちにとってなによりの喜びでした。

また諸先生には、短時日のあいだに評価報告の作成をお願いしました。暖かい励ましの評価とともに、改めるべき問題点や解決すべき課題を、具体的にかつ大所高所の見地から率直に指摘してくださいました。評価委員報告の指摘事項については、外部評価委員会、学科会議、教授会で対応を協議し、その結果を本報告書にまとめております。内容はまだ十分でない面もありますが、個別の課題解決ともあわせ、引き続き議論を続けていくつもりです。

文学部の理念について、貴重なご提言をいただきました。「20世紀を彩る物質的幸福とは異なるタイプの、精神的豊かさを生きるライフ・スタイルの提案」（吉田教授）を行う人文学のあり方や、「物質文明が飽和し、社会が高齢化する、これからが本当に文学部が必要とされる時代」（中野教授）等々について、意味するところをさらに深く議論していく必要があるとうけとめました。また指摘事項の一つに、文学部がかかえる教養部廃止に伴う諸問題がありました。これについては、岡山大学全体の協力なくしては解決できない側面もあるとはいえ、解決の糸口を見いだし、学部の将来構想と結びつけつつこの問題を大胆にそしてより高い次元で解決していく責任は、まさに文学部自身にあるといわなければなりません。

評価委員の指摘事項のなかには、このように一定の時間をかけて問題解決をはかっていくべきものもありますが、それはたんに課題を先送りするということではなく、ただちに改善することのできる事項とあわせ、手順をかさねて一步一步着実に改革の駒を進めていくということではなければならないと思います。その意味では、これから外部評価実施のほんとうの意義が問われることになるといえるでしょう。

ともあれ今回の外部評価は、日常の忙しさにまぎれてついつい内向きになりがちなたくしたちに強い刺激を与えるものとなりました。外部評価委員諸先生のご尽力に、重ねてお礼もうしあげる次第です。大学審議会の答申を受け、岡山大学では 21 世紀へ向けた大学改革を進めていますが、文学部も今回の成果をふまえ、足下をしっかりと見つめながら新しい教育研究の構築につとめたいと思います。

1999 (平成 11) 年 12 月

文学部長

稲 田 孝 司

目 次

はじめに

外部評価の経過と内容

人間学科

外部評価の日程と方法	1
評価報告（眞方忠道委員）	2
外部評価への対応	6

行動科学科

外部評価の日程と方法	11
評価報告（吉田民人委員）	12
外部評価への対応	16

歴史文化学科

外部評価の日程と方法	21
評価報告（森正夫委員）	22
外部評価への対応	28

言語文化学科（ヨーロッパ系）

外部評価の日程と方法	33
評価報告（戸田吉信委員）	34
外部評価への対応	40

言語文化学科（アジア系）

外部評価の日程と方法	43
評価報告（中野三敏委員）	44
外部評価への対応	47

文学部

外部評価への対応	51
----------	----

講演

「文学部の未来」中野三敏委員	55
----------------	----

あとがき

外部評価の経過と内容

主な経過

1999年5月19日	外部評価実施決定（教授会）
7月1日	外部評価委員選定依頼
9月1日	各委員へ評価資料と評価項目を送付
10月20日 ～11月10日	外部評価実施（期間内2日）
10月20日	外部評価委員会発足（対応策の検討と報告書編集のため）
2000年1月31日	外部評価報告書刊行

評価委員

人間学科	眞方忠道	神戸大学文学部教授，前神戸大学文学部長 (実施日10月21～22日)
行動科学科	吉田民人	中央大学文学部教授，前東京大学文学部長 (11月8～9日)
歴史文化学科	森 正夫	愛知県立大学長，前名古屋大学文学部長 (10月25～26日)
言語文化学科 (ヨーロッパ系)	戸田吉信	東亜大学大学院教授，前広島大学総合科学部長 (11月1～2日)
(アジア系)	中野三敏	福岡大学教授，前九州大学文学部長 (11月4～5日)

評価項目

1. 教官組織
2. 研究
3. 教育
4. 国際交流
5. 施設
6. 特記事項
7. 将来展望

評価資料

1. 岡山大学文学部自己評価・自己点検報告書（1999）
2. 岡山大学文学部案内（1999）
3. 岡山大学文学部学生便覧（1999）
4. 岡山大学文学部専門科目シラバス（1999）
5. 岡山大学五十年史（1999）

各委員による視察，インタビュー（教官対象，学生対象）など

人間学科

人間学科 外部評価の日程と方法

10月21日

- 10:00 - 10:30 学部長挨拶
- 10:30 - 11:30 学部生および院生との面談
人間学科の学部生および院生（計 20 名）との面談およびアンケート調査を行った。
- 11:30 - 12:40 昼食をはさんで懇談
文学部長，評議員，人間学科教官 2 名
- 12:40 - 17:30 授業参観および受講学生との面談
下記の各授業をはじめから参観した後，後半の 20 分間を用いて受講学生との面談およびアンケート調査を行った。
- 3 限 哲学史概説（成田教官）
人間学科の学生のほか，文学部の他学科および他学部の学生も受講
- 4 限 西洋倫理思想史演習（出村教官）
人間学科倫理学履修コースの学生および他学部の学生も受講
- 5 限 人間学入門演習（龍野教官）
人間学科芸術学・比較文化学履修コースの 1 年次生を対象とし，視聴覚機器を使用

10月22日

- 9:30 - 11:00 施設等の見学
岡山大学附属図書館，考古学資料館，文学部視聴覚教室，文学部 1 号館ならびに一般教育棟にある教官研究室，人間学科各履修コースの学部生・院生演習室を見学した。
- 11:00 - 12:00 教官との面談
各履修コースに関係する教官，計 5 名との面談を行った。
- 12:00 - 13:30 昼食をはさんで懇談
人間学科教官 7 名
- 13:30 - 15:00 講評
文学部長，評議員，文学部自己評価委員長，人間学科の全教官および他学科の教官有志が参加し，講評の後，質疑応答と意見交換を行った。

人間学科評価報告（眞方忠道委員）

予め、大学概覧、文学部案内、学生便覧、授業科目シラバス、自己点検評価報告書、及び人間学科諸教官の著書乃至論文一点の提出を受け検討を加えた。更に10月21日、22日の2日間にわたり、施設見学、授業参観学生諸君との座談会、人間学科教官との質疑応答を行った。以下、気付いた点について報告する。

1. 教官組織

教官の年齢構成が40代後半以上11名、30代後半～40代前半4名となっている。種々事情があることは理解できるが、若手教官には学生が心をひらいて接することができるメリットがあり、その点を考慮に入れる必要を感じる。本来、助手が読書指導、学生の適性と興味に応じたアドバイス、教官には尋ねにくい質問、相談への応答等、その役割を果たしていた。改組及び定員削減で、助手が大幅減となったのは、全国の大学の教育研究上の重大問題である。せめてその代替策として、ティーチング・アシスタント、リサーチ・アシスタントの更なる活用が望ましく思われる。

2. 研究

人間学科の場合、ドイツ関係の研究者が半数を占め、西洋古代中世、フランス、日本研究が1～2名となっている。特にドイツ関係の層の厚さは評価できるが、英米関係及び20世紀の思想、哲学関係がやや手薄に思われる。応用倫理学（環境、情報、医療等）の更なる充実も必要であろう。人間学科としての有機的教育・研究態勢の整備が目下途上にあるとの印象を受ける。

研究業績については時流に流されず、夫々の分野で堅実な個人研究が進められていることが高く評価される。中に少々傍証不足、安易に流れていると感じられる論文もあり、また、発表機関については、人文系の学会状況からすればよく理解できるものの、「学部紀要」に片寄りぬ努力も必要と思われる。なお、人間学科として統一テーマのもとで縦断的な研究を企画するならば、現スタッフによる興味深い成果が期待されるとの確信を得た。

3. 教育

概論講義、演習、専修入門基礎講義を参観した。夫々極めて工夫に富んだ授業で、学生の満足度も高かった。卒業論文指導についても総合演習、学会形式の中間発表等、きめ細かい工夫がこらされている。なお、学生からは、各学問分野の全体像、見取図を与える概論（現在はどちらかという担当教官の専門に概論が集中する）及び各教官の自分の研究の意義を語る講義の要望が出されたし、分野によっては、教官の指導のもとでのサークル活動の必要が訴えられた。

4. 国際交流

人間学科としては、国際的学术交流が特定教官に限られている面が見受けられる。学問の性質上、外国の学者と個人的交流が有効なことは当然である。しかし欲をいえば、現スタッフを見ると、古代以来の岡山文化圏における外来文化の受容、変容・発信に関する共同研究が可能であり、これは学术交流の糸口ともなり、留学生にとっても魅力あるものではないかとの印象をもった。

5. 施設

中央図書館は誠に素晴らしいもので、旧書庫の整理が完了し、開架に配置されるならば、学生の図書館での勉学は一層充実することであろう。但し、人文系の図書は学生研究室等で、臨機応変に即参照できないと役に立たぬ場合がある。学生から一方で、中央図書館を評価しつつも、学部での不便さを訴える声があったのはよく理解できる。なお、文学部の学舎は老朽化しており、しかも授業中、隣室の授業がまるごと聞こえるのには驚愕する他なかった。学生用研究室、視聴覚、LL 室等、学生への配慮がなされているが、建物自体に学生が魅力を感じにくく、利用しにくいのではないかと。情報教育設備の充実とあわせて改善が必要である。

6. 特記事項

現在、コア・カリキュラム（文学分野）の研究開発が進められており、それに関連させて下記のアンケートに学生（人間学科学部学生、修士学生有志）の回答を求めた。参考までに、結果と自由記入の意見の主なものを紹介する。

（アンケート）

1. 文学部での「必要最小限の共通科目」としては、次の分野が検討されることになっていますが、この中で必要と思われる分野を 5 つ（以内）選択して、その分野の番号に印をつけて下さい。また、第二・第三外国語、古典語に関しては、必要と思われる語学名（複数可）を括弧内に書いて下さい。（その他に印をつけた場合は、できれば具体的な内容を書いて下さい。）

クリエイティブな自己表現力と議論能力を養成するためのカリキュラム。

基礎概念の教育と、基礎概念を駆使して自己表現（口述、論述）を行う能力を養成するためのカリキュラム。

日本語教育（日本語の読み、書きの能力。漢文教育）

実践教育カリキュラム（フィールド学習、社会的実践現場での学習等）

語学教育 I：英語

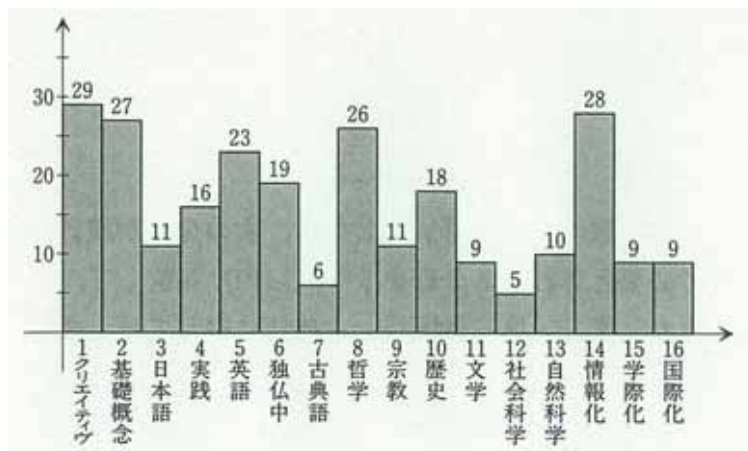
語学教育 II：第二・第三外国語（ドイツ語、フランス語、中国語等）

第二外国語（ ）

- 第三外国語（ ）
 古典語（ギリシア語，ラテン語）
 （ ）
 哲学教育（学問全体のあり方，思想史，哲学的思考などに関する基礎知識）
 宗教教育（宗教に関する基本知識，科学と宗教，人間と宗教，文学部諸学間と宗教等）
 歴史教育（同上）
 文学教育（同上）
 社会科学教育（同上）
 自然科学教育（具体的科学知識，生命や環境に対する知識，科学史，科学思想史，科学哲学等）
 情報化（コンピューター関係等）
 学際化
 国際化
 その他（ ）

2. 文学部での「必要最小限の共通科目」について何か希望することがあれば，書いて下さい。

アンケート集計結果（回答者 54 名）



自由記入

- ・英語については実践的なものが欲しい。
- ・独，仏，中その他朝鮮語，アジアの言語，ヒンディ語，アラビア語，スペイン語，ロシア語，イタリア語を希望。
- ・専門としての外国語の充実を望む。
- ・外国語の義務づけ反対。（必要とする者のみをとればよい）
- ・情報リテラシーの授業を希望。
- ・福祉関係の授業及び実践教育を希望。

- ・文学部の identity を学ばせる文学部共通科目の設置を。
- ・ディベートの実践。
- ・アンケートの , , は実際の学問分野で習得するのがよい。
- ・社会生活に関する基礎教育（インチキ商法，サギ，新興宗教，インターネット犯罪等への対策，法律等々）が欲しい。

7. 将来展望

- (1) 人間学科の各専修が従来 of 古典的，伝統的ディシプリン重視の教育・研究を目指すと共に，各専修が有機的に協力する横断的な教育研究分野の開拓を検討中ときき，大いに期待される。
- (2) 文学部学生として身につけて卒業してほしいもの（普遍性）と，岡山大学人間学科ならではの特色（独創性，個別性）とを両立させる教育研究体制がこれから一層必要となるものと推測される。

外部評価への対応

眞方忠道外部評価委員に指摘された検討課題は [評価] 欄に記し，それに対する人間学科の応答は [対応] 欄に記す。

1. 教官組織

[評価]

教官の年齢構成におけるアンバランス，特に若手教官が少ないことが指摘された。若手教官がいることが学生の教育指導において望ましいであろうということ，それに代わる方策としては TA の活用が考えられることが提案された。

[対応]

教授ポスト，助教授ポストの構成上，現在のような年齢構成になっているが，学生指導において指摘されたような問題が生じることも事実である。平成 11 年 10 月より若手教官が 1 名加わることになったが，提案されたように，さらに若手教官の役割に代わるものとして TA，RA の活用が考えられる。TA，RA の活用の仕方に関しては，教官と学生の間であってどのように学生指導や研究室運営に関わってゆくことができるかを検討したい。現在は，6 名の TA を雇用しているが，今後さらに各履修コース 2 名を目標に増やしたい。

2. 研究

[評価]

(1) 学科全体における教官の研究分野のアンバランス。(2) 研究業績は堅実な研究であると高く評価されているが，研究論文の発表機関の問題。(3) 人間学科としての統一テーマによる共同研究の推進。以上の 3 点が指摘された。

[対応]

(1) 研究体制においては，人間学科の教官の専門分野においてはドイツ関係の研究者が充実している反面，手薄になっている分野があるとの指摘であるが，今後，指摘された英米関係・応用倫理学などの研究分野を考慮しながら，学科または講座としての観点から偏向のない研究体制を整備して行きたい。

(2) 各教官の研究活動に関しては，今後も堅実な研究をさらに進めてゆきたい。また発表機関に関しては，学内では人間学科教官の関係する『学部紀要』『フィロソフィア』『邂逅』『芸術学研究』があるが，さらに一層学外にも発表の場を求めて，多くの研究者の目に触れ意見交換ができるように努力したい。

なお，研究業績が評価される場合に，今回は考慮されていないのであるが，外国の文献資料の翻訳・注解，日本の研究資料の編纂・編著等に対しても評価をしていただきたい。

(3) 人間学科としての総合的・統一的研究の推進についてであるが，これまで何度か人間

学科（旧哲学科）の教官が文部省の科学研究費補助金を受けて共同研究を行なったことがある。今後、そのような企画ができるように努めたい。

3. 教育

[評価]

(1)教育体制に関しては、卒業論文指導のための総合演習、学会形式の中間発表会などは高く評価された。また委員には授業参観をしていただいたが、授業に学生達も満足していると評価された。(2)他方では、学生からの要望（概論の内容が教官の専門分野に偏ることがないように、各教官の研究の意義などを話してほしい）に応えることの必要性が指摘された。

[対応]

(1)教育指導体制についての、人間学科のさまざまな試みと工夫は評価されているが、今後さらにそれらの改善と充実に努めたい。教育指導に関してひとつだけ追加するならば、卒業論文の要旨を研究室の機関誌に掲載している履修コースもあり、これは学生が研究に取り組む励みになっていると思われる。

(2)学生の意向を汲み取るように工夫したい。「概論」では学生に各学問分野の全体像や見取り図を与えるように努める。また、各教官が自己の研究の意義などを語る試みとして、現在では、1年生用のガイダンス科目（「人間学入門」）や専門基礎科目（「人間学入門演習」）を開講している。

4. 国際交流

[評価]

(1)国際交流が特定教官に限られていることの指摘と、(2)岡山文化圏独自の国際交流（外来文化の受容・変容・発信など）に関する共同研究の提案があった。

[対応]

(1)外国思想文化研究のためには国際交流をできるだけ活発にしたい。人間学科の軍隊交流の現状については、ほぼ毎年のように講義の休暇時期に外国（フランス、ベルギー）にて研修を積む教官、外国（ドイツ、オーストラリア、中国）での学会にて研究発表や招聘講演に出掛ける教官、現在ドイツとアメリカに留学中の教官、さらに、客員教授として外国（エジプト）へ出張する予定の教官がいること記しておきたい。

また、人間学科としては留学生をほぼ毎年1名は受け入れている（比較文化学講座）。留学生の受入れ体制については、現在は以前と比べると留学生の受入れ枠を増やしている。今後は、海外からの研究者の招聘も積極的に進めたいと考える。

(2)提案された岡山文化圏の国際交流に関する共同研究については、すでに文学部の有志で部分的には行なわれているので（「吉備洋学資料研究会」）、そこに参加できよう。

5. 施設

[評価]

中央図書館はきわめて高く評価されている。他方、旧書庫の整理や特に人文系の研究者・学生が利用しやすいような工夫が必要であること、また、施設（学生用研究室、視聴覚教室、LL 教室、情報教育設備）の不備の指摘があった。

[対応]

指摘のとおり施設の不備なことはわれわれも痛感しているが、これは学科としての対応を越えて、文学部全体の今後の検討課題である。

6. 特記事項

[評価]

コア・カリキュラムの研究開発に関して、これからの文学部の在り方について研究する必要が指摘された。

[対応]

コア・カリキュラムの研究開発の問題は、FD の問題との関連において文学部全体で検討すべき課題である。指摘されたような学生の要望が反映するように、カリキュラムの改善のために努力している。眞方委員が作成されたグラフに表示されている項目に関しては、例えば、資料情報の検索などについては平成 12 年度の「ガイダンス科目」で中央図書館での指導時間を設ける予定である口また多言語学習の機会については、現在文学部では英語、ドイツ語、フランス語の他に、朝鮮語、中国語、ロシア語、ギリシア語、ラテン語、イタリア語、スペイン語、セルビア・クロアチア語を学ぶことができるので、学生の積極的な取り組みを期待したい。

眞方委員には、「文学部での必要最小限の共通科目」に関するアンケートの集計を参考にさせていただき心から感謝したい。

7. 将来展望

[評価]

(1)人間学科の各履修コース独自の教育方針と各履修コース間の有機的な協力体制との両立が期待されること、(2)文学部生としての普遍的なものの修得と、岡山大学人間学科の学生としての独自のものの修得という両立を可能にする教育体制を工夫すること。

[対応]

(1)人間学科内の各履修コースが協力して横断的な教育研究体制を開拓するよう検討しているが、具体策としては、哲学・倫理学講座においては、この講座を構成している三履修コースを一履修コースに編成し直すことを検討している。今後これによって、哲学・倫理

学講座内の研究と教育活動の協力体制が進むと思われる。また、すでに芸術学講座と比較文化学講座の二講座で一履修コースを形成し、芸術の理論的研究と実証的研究の連携が行なわれていることも挙げておきたい。

(2)卒業してゆく学生が岡山大学人間学科の特色を身につけるために、従来の少人数教育の上にさらに教育体制について今後検討を重ねてゆく。カリキュラム編成や卒業論文指導などについては、各履修コース内では個別的に意見交換しているが、人間学科として統一した具体的な検討は今後の課題としたい。

入試制度については、現在は文学部の四学科がそれぞれ学科単位の入試を行なっているが、人間学科では、哲学、現代思想、倫理学、芸術学、比較文化学の研究に関して適性をもつ個性的な学生を選抜するために、小論文の問題作成については毎年多様な観点から工夫している。さらには、平成 12 年度からは、文学部では人間学科が推薦入試制度を取り入れ、調査書、推薦書、志望理由書、小論文、面接の総合評価を試み、従来行なわれた入試制度では測れない学生の潜在的能力を見いだすように努めている。

人間学科での研究を志す意欲的な学生のために、学科としては、転学部、転学科、転履修コース等による学生の受け入れ体制を取っている。学生定員という枠があるが、大学入学後の探求の過程において、人間学科へと転じようとする学生を受け入れたい。

以上のように人間学科では、どのような学生を受け入れて、どのように教育してゆくかという問題を真剣に考え、その教育理念を具体化するように試みている。

行動科学科

行動科学科 外部評価の日程と方法

11月8日

9:45 - 10:00 学部長挨拶

10:00 - 11:00 キャンパス案内

学部棟周辺，図書館，マスカットユニオン，情報処理センター，
教養部 LL 教室など，学生や教官が日常的に使用する施設を案内
し，キャンパスの環境を紹介した。

11:00 - 12:00 学科説明

地理情報学，心理学，社会学・文化人類学の各履修コースの代表
が，学科の概略を説明した。

12:00 - 13:00 昼食

学科幹事，学科副幹事，社会学担当教官 2 名と懇談

13:00 - 16:00 研究室訪問(1)

各教官研究室を順次訪問し，研究紹介と個別面談の機会とした。
動物棟や脳波・筋電室などの実験室や研究設備の紹介，知覚心理
学の実験のデモンストレーションも行われた。

16:00 - 17:00 懇談会

学科内全教官が集まり，懇談した。

11月9日

9:30 - 12:00 授業見学，学生インタビュー，研究室訪問(2)

計算機室と LL 室でのデモンストレーション，授業見学（教養教育
科目・英語），学部生インタビュー（社会学・文化人類学），大学
院生インタビュー（心理学）を行った。

12:00 - 13:00 昼食

学部長，評議員，自己評価委員長，事務方責任者，学科副幹事と
懇談した。

13:00 - 13:30 講評

外部評価委員による行動科学科への講評が行われた。

13:30 - 15:30 小講演「大文字の第二次科学革命」

外部評価委員による小講演が行われた。

行動科学科評価報告（吉田民人委員）

1. 行動科学科の位置づけと意義

平成 7 年度の学部改組によって設置された人間学・行動科学・歴史文化学・言語文化学の 4 学科のうち、行動科学科はその「科学」という呼称が象徴するように、文学部の中でも経験科学的色彩の強い学科として異彩を放ち、人文学（the humanities）としての自余の 3 学科と相呼応して、文学部独自のカラーの一翼を担っている。それだけに、人文学 3 学科との教育上・研究上の相互浸透は重要な学部的課題であり、今後とも、この点の絶えざる自己点検を要望したい。

2. 教官組織

ポストの配置は、旧教養部の外国語担当教官の配属を除けば、適切であり問題はない。外国語担当教官の配属については、行動科学科の視点からすればポストのより適切な活用が考えられ、配属教官の視点からすれば不本意配属以外のものではない。いずれも教養部廃止のしわ寄せというべきものであるが、行動科学科にとっては、不十分ながらも学科新設のメリットとセットであるが、不本意配属教官にとってはマイナス以外の何ものでもない点に留意すべきであろう。年齢構成には問題はない。

採用人事の公正とその実力主義は特筆すべきである。とりわけ女性教官の数と比率とその実力には目を見張るものがあり、男女共同参画社会の先駆けとなっている。

3. 研究

各教官の業績は個性的でユニークでオリジナル、関連学会の先端の一つを担うものも少なくなく、研究水準は総じて高い。研究分野のバランスに関しては、著しく専門分化した学問の現状と厳しく限られた教官定員の下では、その要求自体が無理な注文であり、むしろ大学としての個性を、それも現実的には、適度の個性を形成するという方針しかありえないのではないかと。その点からすれば、問題はない。

4. 教育

カリキュラムは適正である。学生と教官の希望の適合性については、教官サイドの研究分野が限定されているところでは、ということは全国いたるところで、とくに卒業論文をめぐって、学生の多様な要求に応えるための工夫が必要になる。大学院レベルではともかく、学部レベルの教育では、学生本人にとっても定かでない無定形な関心や問題意識に形を与えてやる、理論形成や資料収集を方法論的視点から指導する、自らの専門分野を例にして学問の面白さを伝える、等々さまざまな教育手法があるが、この点を評価するためには相当の参与観察が必要になる。だが、少なくとも自己点検・評価報告書の記載による限り、それぞれに工夫が見られると判断することができる。

履修コースの相互乗り入れについては、教官一人当たり担当学生数の過剰問題も絡んで、

かならずしもルールどおりに実現されていない部分もあるが、とりわけ心理学については、教育学部との協調があってよいのではないかと。

学部学生とのインタビューでは、「文学部の心理学」と「教育学部の教育心理学」との相違についての情報、さらには文学部の心理学に「進学振り分け」の関門があるという情報を、前もって岡山大学の受験段階で提供してほしいという強い要望があった。この点は、高等学校の進学担当教員への周知徹底をも含めて、検討課題ではないかと思われる。この事前の情報の欠如が、行動科学科のかなりの学生の不本意進学への不満を増幅させているようである。

大学院学生とのインタビューでは、指導教官の退官や転出に伴う博士コース学生のアフターケアについて、何らかの制度的保証がほしいとの強い要望が出された。希望する教員の指導を求めて他大学の大学院へ転学しようにも、博士コースでの受験の認められる大学院が少なく、キャリアの形成に支障を来すという指摘であった。少なくとも受験時点・合否決定時点で提供しうる退官・転出についての情報は事前に伝え、それに基づいて入学の意思決定をして貰うという措置が必要であろう。もちろんこれですべてが解決するというものでもないが。

なお、後述もするが、インターネットを活用する一心理学教官の教育活動は、特筆すべきものである。

5. 国際交流

国際交流については、とりわけ国際学会・研究集会への参加が顕著であり、充分評価に値する活動である。

6. 施設

日本学術会議の報告書によれば、国立大学の施設は全国的にどこも満足すべき状態にないが、行動科学科に属する 3 つの大講座のうち、既設講座を母胎とするものと全くの新設によるものとの間で、部屋配分などの物的条件に若干の格差があるように見受けられる。この点は歴史的事情や既得権問題も絡んで単純ではないが、やはり改善が望まれる。また、各大講座に属する各教官の共通利用図書配架部屋については、一考の余地があるケースもあった。

7. 特記事項

平成 6 年度末の教養部廃止に伴う現状は、岡山大学における教養教育・一般教育の崩壊を早晚招きかねない。教養部廃止以前にあった在来型の教養教育・一般教育とは異なる新たな理念に立つ教養教育・一般教育のプログラムを、できるだけ早い機に策定すべきではないか。その新教養の理念は、私見によれば、少なくともつぎの 3 点を含む必要がある。第 1 に、「物質科学」と「情報科学」(人文社会系の学問はすべてその基本において「シンボル - ことに言語 - 情報とシンボル - ことに言語 - 性情報処理の科学」であり、「情報科学」は計算機科学や計算機工学に幽閉されるべきではない)とを二つの核とする科学の新

たな全体像に基づく文理統合の実現，第 2 に，異文化共生や文化多元主義を視野に収めた「価値の多様性」教育の重視，そして第 3 は，専門教育と以上の新理念に基づく教養教育・一般教育との威信格差の徹底的・抜本的解消である。

そのためには，文系の責任体制を確立するために，岡山大学の場合，副学長ポストの一つを文系選出ポストにするという制度改革が是非とも必要だと思われる。岡山大学文学部行動科学科の外部評価委員としての職分をこえたコメントであるが，この問題が，つぎに述べる旧教養部外国語担当教官の再配属とも結びついていることから，敢えて発言しておきたい。

語学センター的な組織の新設なしに行われた教養部廃止は，当然のことながら，外国語担当教官の再配属に多くの困難を引き起こした。行動科学科にもその波及効果があり，不本意配属ともいうべき配置換えは，私の専門分野の用語を借用するなら，学部内マイノリティ問題ともいうべき事態を発生させている。不本意配属は，現在のところ，当該教官の学部内における権利と義務とを最適化しているとはいいい難い。この問題の解決には，当該教官の退官・転出を待つ「時間による解決」という消極的対応，「内部調整・内部努力による権利・義務の最適化」という積極的対応，およびそのミックスが考えられ，そのポリシー選択は，学部教授会の明示的・非明示的な決定に依存している。このことを前提にして，つぎのコメントをしたい。

不本意配属教官の教育・研究能力が十二分に活用されるように，例えば，学科内・学科間のカリキュラム相互乗り入れの実効性を保証し，当該教官の専門分野に関係する他学科・他コース学生の卒業論文指導を権利・義務化する一方，学科内での日常的な権利・義務を妥当な形で明確にする必要があるのではないか。この点は，学科内・学科間の自由裁量に委ねるのではなく，学部教授会の課題として解決する必要がある。なぜなら，できるだけ「公的」な対応という形式と実質を整えるためである。ラディカルな変革は痛みを伴うが，岡山大学教官として，教養部解体に伴う痛みをできる限り共有するという姿勢が必要ではなからうか。

なお，学部学生とのインタビューに際して，教官サイドにあった旧教養部と学部との間の格差意識が，学生の感覚にいまなお残照しているのではないかと印象が，私の誤解かもしれないが，一部にあった。もしそうだとすれば，学生と教官との良好な関係を構築するためにも，その過去の意識は完全に払拭されなければならない。

学内のセクシュアル・ハラスメントについての問題意識は評価しうる。学期末試験と同時にされる学生による教官評価のシステムは，その実施時期を再考すべきではないかと思われる。学期末試験という特殊な状況が，学生による評価に一定の偏向を与えうる，などの理由からである。

インターネットを教育と研究に活用する心理学教官については，特筆しておきたい。同教官が実践する教育活動におけるインターネットの大幅な導入も，インターネットを学問的討論の場として論文を作成するというスタイルも，将来の教育・研究の一つの姿を示して極めて先進的・先駆的である。とりわけ，現在，小中高と違って「教科教育法」の縛りのない大学教官の教育方法は，自由であると同時に未成熟であるが，インターネット活

用の教育活動にこれほどの知恵と熱意を傾注する姿勢には敬意を表したい。いま直ちに全教官が採用するのは、研究活動とのバランスや現行世代のコンピュータ・リテラシーの不足からして不可能であるとの意見が多いと思われるが、こうした類の教育面での実績・業績を人事に反映させるべきだと思われる。十二分に評価すべき教育活動である。

8. 将来展望

この報告書の冒頭にも記したが、岡山大学文学部は、人間学・歴史文化学・言語文化学という人文学的色彩の強い3学科と、経験科学的色彩の強い行動科学科とから構成されている。各専門分野のタコツボ化の克服が要請されるという時代を迎えて、本学部の最大の課題は、あくまで一つの私見にすぎないが、人文学3学科の間での相互浸透と人文学3学科と行動科学科との相互浸透という二重の意味での学際化にあると思われる。

研究活動の学際化は上述のインターネット活用が例示するように空間的・時間的制約を超えるから、岡山大学文学部の内部でのみ取り組まれるべき課題とはいえない。同様にして、教育活動の学際化もインターネット活用によって、将来、空間的・時間的制約を超える可能性があるから、岡山大学に限定された文学部教官の空間的・時間的交流が唯一の解決策であるともいえない。ネット上に設立される virtual university の潜在的可能性は著しく大きい。

けれども、当面、全国的な教育研究組織の改革の流れの中で、本学部内部での、さらには岡山大学の文系諸学部との間でのディシプリン相互浸透的な再編が、大きなテーマになるかもしれない。その際、人文学 (the humanities) は、まさに人類の精神文化の継承者・体現者として、価値の多様性と異文化共生を前提にしながら、21世紀をいかに生きるかという課題に真正面から取り組む必要がある。20世紀を彩る物質的幸福とは異なるタイプの、精神的豊かさを生きるライフ・スタイルの提案　それがなければ地球環境問題も解決できない　を、人文学に課された21世紀の課題だと受け止めるべきであろう。新たなライフ・スタイルの提唱は、新産業・新製品の創出に連動しうるのである。意外にも人文学の「経済効果」というべきものにほかならない。

9. 総合評価

教養部廃止の負の波及効果に苦しめられてはいるが、それは岡山大学文学部行動科学科の責任に帰すべきことではない。その点を考慮すれば、本行動科学科の組織としてのパフォーマンスは標準以上のレベルにあると総括することができる。

外部評価への対応

1. 教官組織

「旧教養部の外国語担当教官の配属」が、学科にとってポストの適切な活用という点で課題を内包するものであり、また「不本意配属」との印象を払拭しきれない経緯のものではなかったかという点においては、改革以前の歴史を背負った現象とはいえ、まさに必然的なご指摘を頂いたものという現状認識を強くしている。

この問題への今後の対応策としては、教育指導が履修コース単位に制限される現状を改めて、教員組織と教育組織を同一視しない方向で解決の手がかりを考えていきたい。具体的には、学生の履修を柔軟化し、単位取得や卒業研究の指導教官に流動性を持たせることが考えられる。すなわち、現実的に可能な方策として、まず全教官が1年次の初級のみならず、2-4年次の中級から上級レベルに該当する授業を担当し、また教官の専門領域における卒業論文の指導を可能にする道を開くことである。そのためには、大講座制の利点を生かせるよう、学部生の教育体制を低学年時から細分化してしまわず、積み上げ方式で構造化していくような学部全体の方針を整えることが前提となる。

学部レベルでの調整に先立ち、修士課程の柔軟化をまず進めることも考えられる。他大学の例にならって、カリキュラムや単位取得の設定の自由を増やし、所属に縛られない教育・研究を実施することも、可能性のある方向と考える。

ただし、現在修士課程の改組計画が進行中であるが、専攻の内容や規模、それに伴う講義や演習の開設数などの具体的項目は、まだ今後の議論に負うところが大きく、早急に慎重かつ十分な討議を重ねていく必要がある事柄と認識している。

なお、旧教養部教官の配属に対する受け取り方は一様でなく、現状のメリットに注目する意見もあるが、こうした多様性の存在自体が評価や対応を困難にする一因と考えられ、現員の意向を尊重しつつも、慎重な対応が望まれる。

他の教官ポストの配置は「適切であり問題はない」という評価をいただいたが、先の改組後、実質的に本学科は質量両面で充実してきた。採用人事の公正さや女性教官の存在感への評価も励ましと捉え、今後ともさらなる成熟を目指したい。

2. 研究

各教官の業績は「ユニークでオリジナル」「高い研究水準」と評価されたので、今後とも一層のオリジナリティを発揮する方向で努力を続ける。

3. 教育

「不本意進学」が生じているとの指摘については、教育上看過できない問題と受け止めている。こうした認識がやはり学科内でも高まってきていたため、進路振り分けに関する指導上の工夫を数年前から始めたところである。具体的には、1年生のガイダンス科目での詳細な説明、ホームページでの紹介、学部案内の記載の改善、大学公開講座でのPRなど

である。さらに修士課程案内の作成や、外部組織への情報提供を、広報委員会など関連組織へ働きかけたいと考えている。

履修コースへ進路振り分けが行われた後の教育指導体制についても、他コースへの学問的興味を満たすための工夫は案出しよう。例えば、行動科学科の学生については、特講、演習とも、3年次までの他コースの受講を認めるといった措置が考えられる。そのためには、全体の講義・演習の単位数の制限を縮小して、履修コースを超えた受講の可能性を増やしていく体制が必要になる。進路振り分けの方法や定員の設定などに関する再検討を含めて、今後時間をかけて、柔軟化の可能性を検討していきたい。

「教官の転出」に伴う大学院生の指導上の不連続性に関する指摘については、大学間の垣根を低くして教育交流の余地を増やす方向へと、大学レベルの働きかけが必要と認識している。

学内の「他学部との協調」が現状以上に可能なのではないかとこの指摘については、確かに改善の余地が残るものと受け止めている。カリキュラム面での本学科側の開放性はかなり高くしてきたのだが、残念ながら他学部も同様に対応するケースばかりとは限らない。これまで教官個人や履修コース単位で、その都度受講許可をいただけるよう働きかけるなど、交渉に努力してきたものの、やはり限界があることは否めない。学部間の相互の教育交流の一環として、学部レベルでの調整が試みられることに期待している。

「学生の多大な要求に応える工夫が必要」という「全国いたるところで」の問題は、当学科でも当然対応が求められる問題と認識している。現在のところ、限られた人数で学生ニーズに対応する最大限の努力をしていることは、卒業論文の題名の多様性などから推し量っていただけるものと思うが、さらなる努力を継続していくこととしたい。

4. 国際交流

「国際学会・研究集会への参加が顕著」と評価されたが、こうした教官の研究面における盛んな交流活動に加えて、中南米、アフリカ、ヨーロッパからの留学生受け入れ実績もあり（1994年度にボリビア、ブラジル、チュニジア、ポルトガルより各1名）、今後とも努力し続けたいと考えている。

5. 施設

新設講座の施設に、他講座との「格差がある」「改善が望まれる」との指摘については、学科全体としてみても、まだ不十分な施設でしかないという現状を、問題視すべきものと捉えている。現在のところ当学科の設備面は資格面積を満たしておらず、正常な姿になるよう、施設関係の委員会などへ働きかけたい。例えば現存する建物の利用の仕方、解決可能な面もある点に注目したい。根本的には、学部棟の新設が望ましい。

一考の余地があるとされた「共通利用図書の配架部屋」については、現在はこのような設備は存在していないが、新設するにも予算措置が必要となるため、図書館の充実と積極的活用を考えたい。

6. 特記事項

「教養部廃止に伴う現状」が、「岡山大学における教養教育・一般教育の崩壊」を招きかねないという指摘は、真摯に受け止めている。教養教育・一般教育の新たな理念とプログラムの創出、専門教育との威信格差の解消、副学長ポストの運用と責任体制については、全学的問題として真剣に検討する必要があると認識している。

「外国語担当教官の再配属に多くの困難」を引き起こした先の教養部廃止が、行動科学科にも「波及効果」をもたらしている現状については、学科ではきわめて重く受け止めている。専門外の講座への教官配置が発生したことについては、学科を越えた問題であり、この問題の解決には学部での話し合い調整が不可欠である。例えば、他学科学生への卒論指導の道を開くよう、学部全体で話し合うことが考えられる。

講座制や履修コース制を柔軟化していけば、この困難に伴う問題はかなり解消されていくものと考えられる。ただしこれは学科目制を希望するという意図ではなく、教育における柔軟な対応を念頭においたものである。

もし講座制を前提とするならば、外国語担当教官に以下の授業を担当してもらう案が考えられる。1) 専門性を生かした新しい科目を設置して、学科の「専門科目」に指定したり、専門科目への読み替えを可能にする措置をとる。2) 学科単位で「共通科目」を新設する。3) 履修コース単位の「特講」の枠で授業をしてもらい、他学科の学生も行動科学科の専門科目として履修したり、語学の単位に読み替えたりできるよう措置する。4) 現在は、共通科目として授業が行われているが、それを当学科の学生の「必修科目」に指定する。

現在は専門科目の履修指定数が多すぎるという認識に立ち、他学科や他学部の科目履修を推奨する考えも含んで、「共通科目」という枠を定めて、多めの履修数を指定しておき、狭い専門性にとらわれない履修構成で卒業していけるようにする案も考えられる。その際は、修士課程の教育に現在の学部高学年次の内容を移行する改革も、併せて実施する必要があるだろう。

具体的に専門科目を減らす場合、教養教育科目のほか、専門科目として履修コース内必修科目、学科内他履修コース必修科目、他学科履修コース必修科目、他学部を含む自由選択科目、卒業論文の単位数に関して、バランスのとれた単位数になるよう実施案を考えていきたい。

現実に、当学科の外国語担当教官が現在開設している高学年次向けの授業には、学科内のみならず他学科の学生の履習もあって、確かな学習ニーズが存在している。限られた範囲とはいえ、学部内でこうした教育実績を上げてきた事実もふまれば、卒論指導を含めた教育ニーズに応える準備は整っているものと思われ、指摘されたような「教育・研究能力が十二分に活用されるよう」な「内部調整」が待たれているといえよう。

学部全体の問題との認識に立てば、学部レベルで解決に取り組むのが理想だが、仮に学科単位で対策を実施することが求められるとなった場合は、具体的に考えていけば、「社会文化論（仮称）」という授業を設置し、各履修コースの必修科目として「社会文化論」特講

および演習を含め、卒業論文指導も行えるものとするカリキュラム改正が考えられる。仮に学科内での設置となれば、それが行動科学専攻の学生の教育にどう関与するのかといった、学科の理念と対応させた位置づけや、内容の検討が必要になると予想されるため、将来的に詳細な審議を続ける必要があるだろう。開設単位をどこに置くかは、学部全体でのバランスを念頭に置いて慎重に考えていく必要があるだろう。

基本的に、全教官が専門と教養の両方の教育に携わるのが正常な形態と考えられ、この点で偏った状態の解消を目指すべきであろうと考えている。

「セクシュアル・ハラスメント」への取り組みは進んだものと評価されたが、全学的にはまだ発足して間もない制度であるので、今後の努力を続ける所存である。授業評価のシステムについては、教務関係の委員会での検討を要するものと思う。

「インターネット活用の教育」については、今後は、さらに展開が期待できるので、手法を広く伝えたり、情報交換に応じたりして、貢献していきたいと考えている。

7. 将来展望

「行動科学科の位置づけと意義」への評価として、実証科学的な性格を持つ行動科学科には、「経験科学」的な色彩を生かして、文学部の他の「人文系 3 学科との学問的相互浸透」が期待されている。この点に関しては、修士課程の改組を視野に入れながら、FD 委員会の検討とも関連させつつ、努力していきたい。具体的には、概論などの授業の開放度を高めて、他学科の学生を受け入れ、端緒として教育レベルでの相互浸透を図りたいと考えている。

「精神的豊かさを生きるライフスタイルの提案」を「人文学の 21 世紀の課題」と捉えるべきだという論には、まさに真摯に耳を傾け、自らの問題として切実に思考し行動していく姿勢を共有したいと考えている。これはまた、大学改革にどう取り組むかと不可分の問題と認識している。文学部存続の意義や必要性を、広く社会に向かって強調し、情報発信をしていく努力が必要と考える。これは、学内においては、全学の教養教育に対する文学部の教育貢献の認識と関係する問題であり、文学部の営みは、人間存在の基盤に関わる人類必須の教育・研究であるとの主張を行うべきである。

歷史文化學科

歴史文化学科 外部評価の日程と方法

10月25日

13:00 - 14:00 学科全体の説明

日本史学履修コース・東洋史学履修コース・西洋史学履修コース・考古学履修コース各コース2名が参加し、石田教官による学科の経緯と現況についての説明と質疑応答があった。

14:10 - 15:30 各コースの説明

各コースの教育・研究状況について、それぞれ20分程度の説明があった。日本史は倉地教官，東洋史は佐藤教官，西洋史は本地教官，考古学は新納教官が担当した。

15:40 - 17:00 教官全員との懇談

教官は全員参加し評価委員と意見を交換した。

(以上、2号館の小会議室にて)

10月26日

9:00 - 11:30 各コースの研究室・演習室視察，学生へのインタビュー

日本史学，東洋史学，西洋史学，考古学の学生研究室，院生室，考古学資料館を各20分程度視察し，学生の代表数名と面談した。
(歴史文化学科の教官は同席せず。)

日本史教官の案内で，岡山大学附属図書館の池田家文庫を参観した。

11:30 - 13:00 学部長，評議員らとの懇談と昼食(文学部委員会室)

13:30 - 15:00 評価委員による講評

文学部長，評議員，文学部自己評価委員長，歴史文化学科の全教官，および他学科の教官有志も参加し，総括的な講評を受けた
(文学部会議室にて)

歴史文化学科評価報告(森 正夫委員)

1. 教官組織

概評

歴史文化学科 3 講座の教官定員は、教授 11 名、助教授 6 名合計 16 名である。教官 1 名当たりの 1 学年の学生定員 40 名に対する比率は、1 : 2.5 であり、大学院修士課程の学生定員 10 名を加えた 50 名に対しても、1 : 3.1 であり、教官 1 名につき平均 3 名強である。教官 1 名当たりの学部・大学院修士課程学生収容定員総数 180 名に対する比率も、1 : 11.3 で、教官 1 名につきわずか 11 名台である。教官定員は、丁寧な少人数教育を実施することを可能にするに十分な量を確保している。

歴史文化学科には 3 講座の下に、学問の 4 つのディシプリンに対応して、東洋史、西洋史、日本史、考古学の 4 つの履修コースが設置されているが、定員に臨時増員分を加えた各コースの教官数は、5 : 4 : 4 : 4 であり、非常に均衡がとれている。また各コース別の専門分野についても、当該コースの特質をふまえ、東洋史コースにおいては時代・地域別に、日本史コースにおいては時代別に、西洋史コースにおいては地域別に、考古学コースにおいては領域別にそれぞれ配置がなされ、教育・研究両面からの均衡がよく考慮されている。

また、年齢別構成においても、高年・中年・若年の三結合が、学科としても各コースとしても実現されている。

また、自己評価・外部評価のいずれに際しても看過されがちな学科の運営のあり方や教官相互の人的関係といった、いわばソフト面についても、「フラットな関係」(石田教授 25 日午後口頭報告)を基盤とし、率直に発言できる自由な空気が存在している。

以上から、教官組織はほぼ理想に近い水準にあると評価される。

問題点

もし問題があるとすれば、それはむしろ学部全体に関わるものである。『岡山大学文学部自己点検・評価報告書:1999』(以下『報告書』と略称)では、その第 1 章 3・教育指導の項で教養部改革にともなう旧教養部から文学部への大幅な教官移動のマイナスの影響が強調されているが、歴史文化学科についてはそれはほとんど無いといってよい。また、先述のように、量的には、1 教官当たりの学生・院生定員も少なく、私立大学等に見られるマスプロ講義や担当コマ数の過剰もない。もっとも学部全体としても、教官 1 名当たりの平均担当コマ数は年間 9.6、1 期あたり 4.8 で、1 週約 5 コマであり、全国的に見てもオーバーワークとまでは見なし得ない。にもかかわらず、25 日午後の歴史文化学科側からの説明と小職との質疑においては、歴史文化学科の教官にかなりの疲労感・負担感のあることが表明された。

教官の方々のご発言を総合すれば、原因は、各種会議の増加、事務職員の定員削減にともなう教務学生係の人数の過少など、金学部にかかわるもの。社会人や留学生を対

家とする博士論文指導の質的量的負担，一般教育科目 1 コマ当たりの受講者の過大など，特定の教官に現象するもの，さらに，1 年次から卒論指導に至る丁寧な教育システムの維持のように，全学部共通ではあるが歴史文化学科においてとりわけ強く意識されているもの，など多様である。

したがって，解決は容易ではないが，名古屋大学文学部や熊本大学文学部などで，教特法の範囲内で実施されている半年の研究専念期間 - サバティカルタームの設定なども，一つの方途である。ちなみに，これらの文学部ではこの設定は有効に作用し，教官から歓迎を受けている。

2. 研究

概評

第 3 章「研究活動」の項によれば，歴史文化学科教官の研究活動は非常に活発である。とくに 科研費における考古学関係教官，国内共同研究における東洋史，日本史，考古学関係教官，学術刊行物における 4 コース教官，教員の在外研究における東洋史，考古学教官，国際学会・研究集会への参加における東洋史・考古学・西洋史教官の活躍は顕著である。また第 9 章「教官の教育・研究活動」は，1994 年度 - 99 年度前半の 4 年半の間の業績が採録されているが，文系の場合，こうした短期間に，1 学科 17 名の全員がそれぞれ相当数の研究成果を出すということは容易なことではない。

全体として歴史文化学科の研究活動は非常に活発であると結論することができる。

問題点

教官の昇任人事における委員会構成人数の縮小以後，教官が相互の研究を認識する機会がなくなったとの意見が出されていた。歴史学は各ディシプリン間に共通性が強く，相互理解の基盤があるだけに，相互の研究活動を支援する学科全体での研究会は有用である。また，地理学が行動科学科へ移動して以来，教育における単位の取得を除き・教官の研究上の交流がなくなったという事態も見られるが，学界ではむしろ歴史学と地理学・文化人類学・民族学との共同がむしろ強まっていることを考慮すると，本歴史文化学科における地理学との交流への努力もまた望まれる。年 2 回程度の研究発表会を開くだけでも相互理解は非常に深まり，相互支援のよいきっかけになる。

3. 教育

概評

『1999 年度学生便覧』の履修細則の「履修コース」(モデルカリキュラム)によれば，岡山大学文学部の各学科を通じて，入学直後の 1 年前期から卒業論文作成に至るまでのカリキュラムは非常に緻密に編成されている。歴史文化学科においても同様であるが，25 日午後の歴史文化学科各コースからの報告によれば，東洋史・西洋史・日本史・考古学の各コースごとに，それぞれのディシプリンの特質をふまえ，『学生便覧』各 1 頁の紙面からは想像し得ないほど個性的で，しかもきめこまかい教育指導が行われている。

興味深いのは、26 日午後の各コースの学生へのインタビューの結果、どのコースの学生も、現行の「履修コース」の枠組みとそれに沿って現実に行われているカリキュラによる教育指導を肯定的に受け止めていることである。1 年次から 4 年次に至る体系的で緻密な教育指導により「リードしていただいているという安心感が得られる」(日本史)という声は代表的である。また、「教官からの指導だけでなく、先輩の指導や相互学習が有用である」(考古学)との意見は、コースごとに保持されている学生の学習への主体的態度の重要性を示す。総じてコースごとの体系的で緻密なカリキュラムと少人数教育とが、本学科では有効に機能していることがわかる。

問題点

各コースからの報告では、近年、卒業論文の水準の低下傾向、あるいは補正すればすぐに雑誌論文に採用されるほどの個性的で優秀な論文の減少が指摘されている。カリキュラムの優位性と少人数教育による教官指導の丁寧さが顕著であるだけに、卒業論文に見られるこうしたマイナス面の分析は必要であろう。なお、一教官からは今日の中等教育の欠陥が理由として挙げられており、この側面からの検討も必要である。

また、ある履修コースでは、学生から、教官が研究室に不在がちで指導を受ける機会が少ないとの指摘があった。教官の活動の中には学生に対し一々説明すべきでないものやすることのできないものもあるが、教官として自己のコースの学生の渴望への認識は必要であろう。

4. 国際交流

概評

教官の研究活動の一環としての国際交流については、すでに研究の項で言及した。

学生の国際交流は、第 2 章教育活動・6・留学生によれば、東洋史学履修コースにおける 1 年あるいは 1 年以上の長期海外留学が非常に活発である。これは教官サイドの指導・支援が系統的・持続的に行われていることを示す。同コースで短期の留学生が毎年数名ずつ出ていることも注目される。

外国人留学生の受け入れについては、学科別のデータがなく、本学科の動向は評価できない。ただ、アジア経済危機による減少傾向の中で、文学部として 98・99 年度と再度増加傾向にあることは、高く評価される。

問題点

東洋史以外の歴史文化学科及び他の 3 学科から私費を多く含む海外留学は今後も増加するであろうと予測されるし、またより積極的に海外留学を奨励する必要がある。その際、文部省が 97 年頃から、休学での海外留学で取得した単位の認定を可能にする措置を取ったことに留意し、学内規定を改正して休学留学した学生の意欲に報いる体制を取ることもあるであろう。名古屋、富山、愛知県立等の大学ではすでに改正がなされている。

5. 施設

概評

岡山大学キャンパス自体の面積，緑化の進んだ環境，南北新食堂をはじめとする厚生補導施設の充実，他の国公立大学の羨望を引き起こすに足る。ただ，文学部・大学院文学研究科修士課程の施設は狭隘で老朽化・陳腐化が目立つ。

問題点

各履修コースごとの学部学生の学習用共用スペースは，それらが本来 4 学年 40 人を対象としていることを想起すればきわめて狭い。大学院修士課程の歴史文化学科関係の共用室では 1 人 1 机が保障されている点において評価できるが，狭く暗い鶏舎に多数の鶏を詰め込んだように息苦しい感があり，快適な環境ではない。

考古学資料館も，狭隘・老朽・陳腐の最たるものであり，収集されている貴重で豊富な資料の保存という点からも，大学院生の研究条件確保という点からも，もはや放置できない状況である。院生からも雨漏りの防止への強い要求が出ている。また，考古学・地理学に不可欠な作図用の広いデスクが欠如していることも深刻な問題である。現状の下でも，せめて安心して作図できるスペースを何らかの形で確保できないであろうか。

6. 特記事項

(1) 大学院について

概評

文学研究榊参上課程については、『報告書』5-6 頁に簡潔にして要を得た「現状の説明」と「(自己)点検・評価」がなされており，とくに付加すべきものは少ない。28-29 頁の募集定員・入試状況の統計もよく整備されている。後者によれば，歴史文化学科関連の史学専攻は，志願者が常に定員を上回り，合格者・入学者も定員に近い線を維持し，97 年度は両者いずれも 12 名で定員を越えている。また岡山大学からの入学者が高い比率を占めていることも学部教育の成果の一端として高く評価できる。

なお、『報告書』6 頁に，修士課程修了者に対する社会の受け入れ体制の未熟，講座の新たな編成，昼夜開講制，社会人特別選抜などが指摘されており，それぞれに妥当である。

『報告書』には，また，修士課程修了者の他の教育機関への進学状況に関する詳細な資料も用意されている。大学院修士課程の教育指導の現状に関する教官側の認識はきわめて周到である。

問題点

修士で社会に出た者について，高度専門職業人養成という見地から，及び修士を経て自大学・他大学の博士課程に進学した者の研究水準について，自立した研究能力をもつ者の養成という見地から，『報告書』あるいは 25 日午後の説明会で具体的な分析がなされるべきであった。

院生の側からは、(i)特講・演習など名目はことなっている、実質は同じであるというカリキュラム運用の不透明性、(ii)学部授業と大学院授業との重複にはマイナス面も少なくないこと、()修士課程と博士課程との接続が個人単位になっており、組織としての体制がないことなどへの批判があった。

非常に緻密に編纂され、内容の充実が顕著な「報告書」の中で、欠落感の大きかったのが大学院文化科学研究科博士課程の現状、大学院文学研究修士課程と大学院文化科学研究科との関連であった。大学院文化科学研究科が独立研究科であるから、『報告書』においては省略したという説明は、あまりにも形式的で説得力に乏しい。また、『報告書』とは別個に、25 日午後の歴史文化学科及び各履修コースの説明において本来なされるべきであったのが、『報告書』5 頁で言及されている修士・博士両課程の改組の検討状況であった。

このうち、前者の博士課程の現状については、石田・倉地両教授から、25 日午後、教官の教育負担の問題と関連して、短大教員及び留学生への博士論文指導と審査が多くの件数にわたっているとの発言があった。後者のうち両課程改組の検討状況については、26 日昼、稲田文学部長からわざわざ資料をご提供いただくとともにご説明をいただいた。

しかしながら、博士及び修士両課程改組を視野に入れ、歴史文化学科の特質をもふまえた大学院教育の理念・目的と人材育成方針は、全体としてはまだ見えてこない。

(2) 今回の外部評価の実施体制について

問題点

担当評議員からは「岡山大学文学部における歴史文化学科の位置あるいはその特徴」を「特記事項」の項で記せというご要請を受けた。しかしながら、今回岡山大学文学部が準備された外部評価の方式では、この要請にお応えすることは、実質的に困難である。なぜなら、人間、行動科学、歴史文化、言語文化の各学科ごとに分離分割して外部評価がなされているため、相互の比較検討が不可能だからである。

今回の方式は理工系の巨大学部が学科単位で外部評価を実施している方式を、学部規模の小さい文学部にそのままあてはめようとしてものである。しかしながら、文学部は、学科ごとの個性や独立性が強い側面とともに、学科を越えた共通性も非常に強く、したがって学部としての一体性が顕著であるという側面を持つ。したがって、4 人の外部評価委員が一堂に会して学部全体の説明を受け、続いて各学科に分かれてミーティングをもち、再び金休会で個別評価と総合評価を行うといった方式が、より適切である。

たしかに、学部全体に関する立派な『報告書』を 2 ヶ月近く前にいただいているので、その上に立って各学科ごとにミーティングとインタビューを行えば、たしかに各学科については豊富な認識と深い理解を得ることが出来る。しかしながら、今回のように各学科ごとに、別個の日程を組んで分割評価を行うと、局部だけしか認識できないというバンデーも生じる。その点、4 人の委員が相互に認識を交流し、学部の教官がたと総合的質疑を行えば、1 人 1 人の委員の 1 つ 1 つの学科に対する認識と理解は相対化され、そこではじめて「歴史文化学科の位置や特徴」もより明確に分析できよう。

なお、4 学科の間ではなく、全国の関係学科の比較で言えば、岡山大学歴史文化学科の教育研究水準は全体として非常に高いと評価される。

7. 将来展望

岡山大学文学部の教育研究理念をふまえた将来展望については、『報告書』冒頭における稲田文学部長の序文、とくに II 頁 4 行目かち 11 行目にかけての部分が見事に言い尽くしている。全国の文学部の共通の課題と解決方向を指摘し得て妙である。「人間そのものをより深く理解できる人材を要請する文学部の教育」(稲田学部長)とその前提としての文学部の学問との重要性は、今日の日本と世界においてますます普遍性を強めている。

ただ、全国の国立大学の中における岡山大学、あるいは国立大学文学部における岡山大学文学部の使命・目標はどこに置くべきであろうか。

大院重点化をほぼ完了し、北海道、東北、東京、名古屋、京都、大阪、九州と分布する旧制大学系文学部の活動に対し、中・四国地域の瀬戸内海側に位置する新制大学で、しかも旧制大学に匹敵する教官スタッフをもつ岡山大学の文学部はどのような方向を目指すのか。東アジアあるいは東南アジアへの発信や、欧米との関係の深化という課題にやはり中・四国瀬戸内海側に位置する岡山大学はどのように対応するのか。

岡山県の国公私立諸大学の一つである岡山大学は、これらの大学と提携・交流しながら、岡山県地域社会にどのように貢献するのであるか。

独立行政法人化の問題ととりくむにしても、岡山大学は、そして岡山大学文学部はこれらの課題ととりくまねばならないのではないか。

岡山大学文学部歴史文化学科の将来展望は、このような意味で、岡山大学あるいは文学部自体の将来展望の構築との関連なしには構想され得ないとする。

しかしながら、岡山大学歴史文化学科は、『報告書』第 3 章・研究活動、第 7 章・社会的活動、及び 25 日午後の説明に顕著にうかがえるように、日本史学講座・同履修コース、考古学講座・同履修コースを中心に、岡山県地域ときわめて緊密に結びついた活動を展開し、同時にこうした活動を基盤に全国学会を組織し(考古学)、資料情報の全国への提供を行って(日本史)おられる。また、歴史文化論講座・東洋史履修コースでは、第 2 章・教育活動・留学生の項、第 3 章・研究活動、第 4 章・国際交流の項に見られるように、東アジア・東南アジアとの交流を恒常的に行い、歴史文化論講座・西洋史履修コースでも、これらの章にうかがえるように、西欧の大陸部との学术交流を意識的に展開されている。すなわち、歴史文化学科の活動には、文学部における人文学のもつ普遍性と、岡山大学文学部のもつ特殊性とを結合する手がかりが内包されている。

岡山大学文学部がその潜在力を生かし、わが国の大学の文学部が旧帝大系のそれをも含めいまだ達成し得ていないところの、新たな人文学の教育・研究の可能性を先駆的に開拓されることを心より期待し、その成果に学びたいと思っている。

外部評価への対応

歴史文化学科は、森正夫委員による外部評価を受けた。以下は、森委員の『外部評価報告』に基づいて、学科で議論・検討の土とりまとめた対応である。記述は、『外部評価報告』で言及された事項のうち、改善を要する問題への対応を重視したので、個別の記載順番は必ずしも森委員のそれと一致しない。また、それぞれの履修コース名を略記したところがある。(例:日本史学履修コース 日本史)

1. 教官組織

1) 1994 年度改組における教養部教官の受け入れは、学部全体に深刻な影響を与えているが、歴史文化学科にはほとんど影響が見られないと指摘された。

歴史文化学科に教養部教官の受け入れの影響が軽微であったのは、当初からあるべき対応を学科として模索し努力してきたことによるところが大きいが、一方で、歴史文化学科にとって「たまたまの幸運ともとれる」改革実施プログラムの結果に落ち着いたという側面もある。また、定員問題で「犠牲」を払わねばならなかった履修コースもあり、専門分野の関係上、教養教育科目の比較的過重な負担を引き受けている個人もいる。この問題は、文学部全体の重要な課題として、今後も留意していく。

2) 数字の上での授業負担数はオーバーワークとはいえないが、会議や学生指導を含めた仕事量は増大したせいか、教官に疲労感が認められることが指摘され、その解決策のひとつとしてサバティカルタームの導入が提言された。

仕事の整理と視野の転換のためのサバティカルタームは、教育・研究活動にとって有効な機会と考えている。定員削減化の中でクリアすべき問題もあるが、他大学の実施例を参考に実現をはかりたい。また内地研究等の制度の活用もあわせて検討していきたい。

3) 教官当たりの学生数、教官の専門分野のバランス、教官の年齢構成の分布は、望ましい状況にあると評価された。

今後も、これらの要素に留意した教官組織の充実をはかりたい。ただ、将来的に不可避免と考えられる定員削減と充実した教官組織の維持の両立のためには、今後の議論の積み重ねが必要である。

4) 学科運営などにおける教官相互間の「フラットな関係」を好ましい状況と評価された。

立場や年齢に制限されずに率直に発言することができる学科内の人間関係は、今後もぜ

ひ維持していきたい。

2. 研究

- 1) 採用・昇任人事における委員会構成人数の縮小以後，教官が相互の研究内容を認識する機会が減少しつつあり，また，平成 6 年度の改組により，地理学が行動学科に移って以来，学際的研究交流の機会が減少しつつあると指摘された。そして，研究上の相互理解と自己啓発を促進するために，例として，地理学，文化人類学等の教官を加えた研究会を，年 2 回程度開くことが提言された。

指摘は，すでに学科としての検討事項になっており，有益な提言であると受けとめている。歴史文化学科そのものが大所帯になり，専門分野が分化していることもあり，さしあたり，個別に専門性の近いところで「越境」していき，その上で本格的な研究交流の場を実現させたい。すなわち，教官個人間の自発的な研究交流とともに，公開講座，総合科目などの機会を活用した研究交流を積み重ねながら，学科内そして学科を越えた研究会につなげていく。また，科学研究費補助金や教育研究学内特別経費(学内科研)の申請を共同プロジェクトで行うことによる研究の学際化も，今後の重要な課題として位置づける。

3. 教育

- 1) 卒業論文作成を目標とするカリキュラム，指導体制はきめ細かに整備されており・学生へのインタビューでもその点に十分満足しているとの判断を得た，と評価された。しかしその一方，カリキュラムと指導体制の整備に対応した卒業論文の質の向上が認められなかったり傑出した論文が減少したという傾向があることについて，その理由の分析が必要との指摘があった。

入学から卒業論文作成に至るまでの体系的で緻密なカリキュラムと指導体制，そして，教官と学生との相互信頼関係の形成は，学科が日頃から留意している課題である。教官一同の努力が，学生に実感として伝わっているとひとまず安堵している。

にもかかわらず，カリキュラムと指導体制の整備が必ずしも卒業論文の質に反映されていない場合があると指摘されたことは，教官一同真摯に受けとめている。高校までの受け身の姿勢が続いているという学生側の問題や，「優」がつくのが普通という成績評価の現状など，検討すべきことは多い。今後，こうした実情について学生の意見も取り入れ，分析と解決の機会をもちたい。

- 2) 教官が研究室に不在がちで指導を受ける機会が必ずしも十分ではないという，一部の履修コースの学生からの発言について指摘があった。

授業，研究活動，公務出張，会議等で研究室に不在がちな場合もあるが，それぞれの教官の事情にあわせ，例えばオフィスアワー等を設置したり，教官の日程や連絡先・メール

アドレスの周知に工夫を凝らすなどして、学生とより緊密なコンタクトをはかっていく。

4. 国際交流

1) 教官の研究活動としての国際交流が活発でありまた近年、学生の短期あるいは長期海外留学が増加しつつあること、とりわけ、東洋史学履修コースで顕著であることに肯定的評価が与えられた。また、海外留学した学生が現地の大学で取得した単位を、積極的に本学部の単位に読み替えるようにすべきとの提言がなされた。

教官一同は、学生の海外留学、海外見聞旅行を奨励し、個別に情報等の提供を積極的に行っている。しかし、財政的な側面も含めて、学生の海外留学促進にむけた学科あるいは学部としての体制づくりは、今後の課題である。

留学中の取得単位の読み替え促進は、教官一同の希望であるが、学部、大学全体の問題でもあり、実現に向けて、留学生専門委員会および学術交流専門委員会に調査と検討を依頼した。なお、現状でも交流協定を取り交わした外国大学での取得単位は読み替え可能であるが、対象大学数は極めて少ない。

2) 文学部全体の外国人留学生受け入れ数は増加傾向にあるが、学科別、履修コース別のデータが得られず、歴史文化学科の現状について評価できないと指摘された。

指摘のとおり、学科や学部として留学生の人数をはじめ様々なデータの管理が不十分であった。今後は教育環境を整備する際の参考のためにも記録を残していきたい。過去 10 年間については歴史文化学科の外国人留学生数は、日本史 5 名(中国、インドネシア、ポーランド)、東洋史 11 名(中国 10、韓国 1)、西洋史 0、考古学 1 名(台湾)である。なお、この数字は、学部生から博士課程まで研究生も含む。

この数年、中国からの留学生は減少傾向にあるが、現在東洋史には 2 名の中国人大学院生が在籍している。

5. 施設

1) 文学部および文学研究修士課程の教育・研究施設は狭隘で、老朽化が目立つこと、とりわけ、修士課程の学生室、考古学資料館の環境は極めて劣悪であることが指摘された。

施設の不備、老朽化の解決は、学部全体の不満であり課題である。これについては常に文学部全体として、改善を要求していきたい。とりわけ、現在建設が始まろうとしている文法経総合研究棟には期待を寄せている。また、考古学履修コースが中心となって、「岡山大学総合研究博物館(仮称)構想検討会」で、大学博物館建設要求の検討がなされている。

6. 特記事項

(1) 大学院について

1) 修士課程を修了して社会に出た者の研究水準，研究能力について，高度専門職業人養成の見地から，また自大学あるいは他大学への博士課程進学者について，自立的研究者養成の見地から，具体的な分析がなされるべきであったと指摘された。

学科として，今後の教育体制の拡充のためにも，卒業生の進路について研究能力の観点から調査・分析の必要を強く感じている。文学部今体としてもそのような分析をすべきであり，現在，文学部・文学研究修士課程の全体に関わる改組を検討中で，この問題の分析を踏まえた改革案を平成 12 年度中に提出する予定である。

歴史文化学科の修士課程修了者の進路について，専門職業人としての就職状況，および博士課程への進学状況は，この 10 年ではおおよそ以下のようなものである。

日本史の場合，代表的な就職先は地方公共団体の教育委員会と中学・高校(教員)で，県内のみならず大阪市や宇部市などに就職した例もある。東洋史では，教員の他に司書があり，また留学経験を生かして中国語教師や対中貿易会社への就職もある。西洋史は，教員の他に受験関連出版社(企画・編集部門)への就職がある。考古学は，教育委員会および岡山大学埋蔵文化財調査研究センターへの就職が主である。博士課程進学については・本学の博士課程への進学者もようやく増えてきたが，他大学へ行く者がまだ多い(大阪大 大阪市立大，奈良女子大，東京大など)。

2) 大学院生へのインタビューにより，文学研究修士課程の授業内容がシラバスと相違することがあるというカリキュラム内容の不透明性，そして，修士課程と文化科学研究科博士課程との接続の曖昧さへの不満があると指摘された。

少人数で，また，専攻分野がある程度確立している修士課程大学院生への授業内容は・年度ごとの履修生の関心に応じて，柔軟に対応してきた。その結果，不透明性を感じさせたと考えられる。改善課題であるので，シラバス記述と授業内容の周知をはかりたい。修士課程と博士課程の接続の曖昧さの改善は，現在検討中の学部・修士課程・博士課程改組の重要な問題である。なお，この問題は文学部全体のそれであり，「文学部の対応」を参照。

3) 修士課程および博士課程の改組を視野に入れ，歴史文化学科の特質を踏まえた大学院教育の理念・目的と人材育成方針の全体像が明確ではないと指摘された。また，『自己評価報告書』から，独立研究科であるという理由で，博士課程(文化科学研究科)についての記述を除外したのは形式主義であるとの不満が表明された。

指摘の内容は，やはり，検討中の改組構想の基本的かつ重要な課題であると認識して，

学部として、現在検討中である。この問題についても、「文学部の対応」を参照。

- 4) 歴史文化学科全体として、毎年度、修士課程の志願者は定員を上回り、また合格者、入学者も定員を確保するか、それに近い数を維持していると評価された。

これは、大学院修士課程の教育指導体制と学部の教育指導体制が成果を収めている証左のひとつと理解している。ただし、前提として、一般に文系の大学院修士課程修了者の職業選択のチャンスが小さいことが根本的な問題としてあり、今後も解決法の模索を続けたい。

(2) 今回の外部評価の実施体制について

1. 今回の実施体制では、4 学科の各評価委員間の意見交流の場が欠けており、結果として、文学部内における歴史文化学科の位置や特徴が把握しにくいとの指摘をうけた。

指摘のとおりである。この問題についても、「文学部の対応」を参照。

7. 将来展望

- 1) 文学部における教育・学問の普遍性とその意義についての基本的理解は、『自己評価報告書』(特に、2 頁 4-11 行)に明確に表明されており、理念として高い評価を受けた。しかし同時に、今日の社会変動をふまえた上で、国立大学における岡山大学の立場(中・四国の瀬戸内側にある新制大学)や文学部の使命・目標と方向性(地域やアジアとの関わり、他大学との提携・交流等)についての将来展望が明確にされるべきであり、それらとの関連の中ではじめて学科の将来展望も構想されるという指摘があった。

具体的な活動については、日本史講座、考古学講座に顕著な岡山県地域・日本全国と緊密に結びついた調査研究、歴史文化講座(東洋史と西洋史)の東アジア、東南アジア、さらには西欧世界との恒常的な学問交流は、文学部における人文学のもつ普遍性と、岡山大学文学部のもつ個別性とを結合する手がかりを内包しているとの助言を得た。指摘を真摯に受けとめ、今後の教育・研究活動の種とさせていただきたい。

言語文化学科
(ヨーロッパ系)

言語文化学科(ヨーロッパ系) 外部評価の日程と方法

11月1日(月)

14:00 - 14:10 学部長挨拶(学部長室)

14:10 - 15:00 学科についての説明

文学部会議室において、対象講座教官全員が参加のうえ、工藤教官が学科の沿革と現状について説明をし、その後質疑応答と意見交換を行った。

15:10 - 16:00 独文履修コース面談調査(独文演習室)

学部学生、大学院生、履修コース教官全員が参加して、履修コースの沿革と現状を説明し、質疑応答と意見交換を行った後、学生・院生演習室等関連の施設を見学した。

16:10 - 17:00 仏文履修コース面談調査(仏文演習室)

履修コース教官全員が参加して、履修コースの沿革と現状を説明し、質疑応答と意見交換を行った後、別室でさらに学部学生、大学院生と質疑応答と意見交換を行い、学生・院生演習室等関連の施設を見学した。

11月2日(火)

9:00 - 9:50 英文履修コース面談調査(英文演習室)

学部学生、大学院生、留学生、履修コース教官全員が参加して、履修コースの沿革と現状を説明し、質疑応答と意見交換を行った後、学生・院生演習室等関連の施設を見学した。

10:00 - 10:50 LL, PC 施設見学

LL 施設と PC 施設を見学し、辻教官と延味教官からそれぞれ現状の説明を受けた後、質疑応答と意見交換を行った。

11:00 - 12:50 懇談(学部長室, 文学部委員会室)

学部長室で、学部長、評議員、自己評価委員長、西前教官と懇談し、意見交換を行った後、文学部委員会室で学部長、評議員、自己評価委員長、清水教官、事務方責任者と昼食を共にしながら、さらに懇談と意見交換を行った。

13:00 - 14:30 講評(文学部会議室)

学部長、評議員、自己評価委員長、言語文化学科の全教官及び他学科の教官有志が参加し、講評の後、質疑応答と意見交換を行った。

言語文化学科(ヨーロッパ系)評価報告(戸田吉信委員)

『岡山大学文学部自己点検・評価報告書：1999』(以下、『報告書』と略)を読ませていただきました。そのうえで貴学部におもむき、学部長、評議員の先生をはじめ、言語文化学科の多くの先生方と膝を交えて懇談する機会を得たことを嬉しく思っております。

以下、私の率直な感想を申し述べさせていただきます。当を得ていない部分、また失礼にあたる個所が多分にあるかと存じますが、あらかじめお許し願います。

(1) 総論

この種の報告書が往々にして学部の現状(教官の業績、カリキュラム、設備、予算、学生数等)と、これこれのを行っているという報告の羅列に終始しがちなのに、ここでは文学部の置かれている困難な状況、とくに教養部廃止に伴う学部改組以来のさまざまな問題が、ありのまま、きわめて率直に語られていることに敬意を表します。

また冒頭、文学部の理念、文学研究が文明社会において果たす役割が、格調高く語られていることに感銘を受けました。これはこれで見事に完結されたものだと思います。しかしながら、礼を失することを恐れずあえて言えば、その一方、いささか寂莫とした物足りなさを覚えざるをえません。

文学部固有の問題の背後に、現在、岡山大学ひいては日本の大学全体が抱えている深刻な問題に対する認識と危機感(個々の先生方は、当然ながら強く感じておられるでしょうが、『報告書』においてという意味です)が、欠落しているとは言わぬまでも、残念ながら十分に伝わってこないのです。そのため、あえて言うなら、大学がそして文学部が現在のままの形で存続しうることを前提にした『報告書』、といった印象を受けるのであります。

もう少し言えば、いま大学は(決して大学だけではありません)さまざまな外圧によって変革を造られています。と言いますか、急激な、世界的規模での社会の変動と、これに伴う学生の意識の変化に対して、制度・組織・教育の面で、要するにシステムとして十分対応しきれなかったと言ったほうがいいと思うのですが、大学はそうした状況を的確に認識したうえで、受動的に外圧に応ずるだけでなく、むしろ積極的に大学の新しいあり方を提言していくべきではないでしょうか。改革とは、本来痛みを伴うものであります。従来大学の慣行に対して、根本的にメスを入れることも念頭に置くべきだと思います。

大事なことは、大学自身が自らの大胆な変革の姿勢を提示することでしょう。

受験生の数が減少し、かつその中で進学率が上昇するということは、ますます意欲の乏しい、無気力な学生、学力の不十分な学生が増加することを意味します。それはすでに何年も前から言われ、私たちも実感していることですが、こうした現実をまず直視すべきでしょう。そのうえで岡山大学は、文学部はどのような学生を受け入れようとするのか、そして受け入れた学生たちに4年間かけてどのような付加価値をつけて送り出そうとするのか、これを明示する必要があるでしょう。このことについて根本認識を共有しない大学は、今後存在理由を問われるかもしれません。そのためには、まず何よりも確固とした教育理

念を全学で確立すべきであると考えます。

明治以来の国家のシステムが根本的に問われている現在、どこに行っても同じような学部・学科がある国立大学が、このままの姿であり続けることは絶対にありえません。

その中で岡山大学は、今後どのような大学であろうとするのか？各学部はどのように学生を教育しようとするのか？

確実なことは、すべての学部が平等な同一歩調でということはありません。文学部はいかなる学部であろうとするのか？またあるべき姿とは？そもそも総合大学とはなんであるのか？

(2) 学部と大学院

学部の段階では基礎的な学力の涵養と、総合的な幅広い物の考え方、問題の把握力を身につけさせることに重点を置き、専門教育は大学院でというのが現在の趨勢だと思えますが、この点、改組を計画中と聞く大学院組織における教育と学部教育の関連、位置づけはどのようなものでしょうか？

(3) 教官組織

大講座に改組された理念は立派なものだと思います。ただ、その理念を具体的に生かす教官組織、教育内容になっているかということ、問題は将来に先送りにされていると言わざるをえません。

「英語圏言語文化論」、新鮮な響きをもっています。だがその内容は旧来の英文学、英語学、アメリカ文学が中心になっています。「英語圏」が実質的に生かされていないという印象です。文学・語学の重要性、そして伝統的な重みと果たしてきた役割を軽視するものではありませんが、そもそもポストが増えだということは、そのポストで「圏」の部分を補うためではないでしょうか。

「ヨーロッパ言語文化論」においても同様です。内容は旧独文、仏文が中心になっています。外国語学部ではないので決してあれもこれもとは言いませんが、他の言語への視点、それにヨーロッパ的精神の本質を追求する観点があってしかるべきだと考えます。

繰り返しますが、ポスト増は本来、こうした大講座の要請を充足させるためのものです。ただ現実には旧教養部教官の移籍ということなので、その方々の専門もあり、一朝一夕にはいかないとは思いますが、大講座の理念は見失うべきでないでしょう。将来、解決の方向に向かわれることを期待いたします。(5)「教育」の項参照。

(4) 研究

研究者として立派な先生方を揃え、決していいとは言えない条件の中で、着々と研究業績をあげられていることに敬意を表します。

ただし研究と教育の乖離は必然として受け入れなければなりません。そして悪条件の中でも文学部のよさと言いますか、大らかさ、小手先の論文数にこだわることなく、大きな仕事を進めていく雰囲気を持ってほしくないと願うものです。

(5) 教育

幾つかの問題を含んでいます。

- 1 学生のニーズに合った、あるいは学生の潜在的ニーズを引き出すような教育を工夫すべきではないでしょうか。たとえば、映像、音楽、演劇、大衆文化といった言語と結びついた文化の講義・ゼミ等々。
- 2 実用言語への傾斜。学部の段階ではトイフル何点、仏検何級といった明確な目標を設定すべきでしょう。また新聞、雑誌等の購読。L.L 教室を利用した世界のニュース番組の教材利用。学部卒業生が映画やテレビを原語で聞き取れるようになれば、誇るにたる教育成果であると言えます。
- 3 現代世界が抱える問題の一角に食い込むような教育。たとえばいまフランスでもドイツでも、他民族の流入という、まさに言語文化の困難な問題を抱えています。

日本でも南米からの多数の労働人口の流入を抱えており、彼等が直面する言語と文化の問題は日本の課題でもあります。私が高言語への視点というのは、たとえばこういうことです。

将来構想というのは、こうした点に対する方向性をもつことです。文学だけではどうしても色褪せた感じをもたざるをえません。またこうした方向によって学生たちの関心も増し、社会的評価も得られるのではないのでしょうか。

- 4 今回の外部評価を通じて、一番大きな問題だと思うのは、教養教育の点検・評価に関する部分でしょう。

非常に率直に書かれていることは評価できますが、ずばり言わせてもらえば、根本的な理念が欠如していると言わざるをえません。苦渋は察して余りありますが、その場その場で、いわば対症的に処理され、問題の本質が糊塗されてきたことによって、問題の解決が先送りされているのではないかと思えてなりません。

手垢のついた一般教育という言葉がまだ堂々と残っていること自体、大きな問題だと思いますが、教養部を廃止し、一般教育の全学出勤(これも言葉としていかなるものか)を決めたとき、岡山大学としてどのように考え、いかなる理念のもとにそれが行われたのか、まったく見えてきません。また一般教育の呼称を廃止して教養教育としたとき、その教養教育の理念はどのようなものだったのか?

硬直化した一般教育ではなく、大学の自主的な判断によって行う教養教育を、真に実りあるものにするための教養部廃止ではなかったかと思うのです。

大学教育(学部教育)が専門教育と教養教育によって成る以上、学部教育にたずさわるすべての教官は、一方また教養教育に参画すべきでしょう。何よりも、各学部は自らの教養教育の理念と内実を明らかにすべきであります。そして教養教育に対して、応分の負担をすべきであると考えます(このことは何も、すべての教官が毎年 1 コマとか半コマとか、教養教育を担当するといった機械的な操作を意味するものではありません。みずからの学部にとって教養とは何かという論議に、責任をもって、真剣に参画することです。機械的な割り振りこそ、教養教育を硬直化させる元凶でありましょ

う)。

こういったシステムの構築がまず大学全体であって、そのうえで文学部の果たす役割りは何かということになるのだと思いますが、そのところがまったく見えてまいりません。

旧来型の一般教育ではだめ、まず新しい教養の理念を提示し、それを実践する方法を大学全体で模索する、これにつきると思うのです。

たとえば医学部であれば「生と死の歴史」とか「生命倫理学」、法学部であれば市民参加の諸問題とか、地方行政のあり方とか、理念が提示されれば、テーマはいろいろとあるでしょう。現代日本はさまざまな困難な課題を抱えこみ、悶え、痙攣しています。大規模店に押されてさびれる一方の商店街、若者達がいなくなった過疎の山村や漁村、ゴミだらけの海岸や川原。たとえばの話ですが、そういう所に学生が実地におもむき、商店街の人々と一緒に街の活性化・再生を考える、あるいは農村で草を刈り、夜、焚火を囲み、あるいは囲炉裏端で村人とともに農村の実情と将来の展望を語り合う、そうした経験が授業やゼミの一貫として組み入れられないものか、またオリエンテーション行事のひとつとして実行されればすばらしいと思いますし、またその体験をレポートとして作成すれば、学生にとっても意義あることではないかと思うのですが。

医学部で人間教育をというさい、たとえば「哲学」や「倫理学」をとらせればという姿勢であれば、それは一般教育的な物の考え方というものです。そのような姿勢からは、断言しますが何も生まれません。医学部にとって、人間教育とは何か、いかにすればそれは可能かということ、徹底的に問い詰め、試行錯誤でもいい、実験を続けていくことでしょう。そこに文学部が協力できることがあれば、これに参画すればいい。

各学部、すべて同じであります。繰り返しますが、全学でそのような理念を共有すること、そしてそのためのシステム・組織を構築することでしょう。

5 全学の語学教育

ここでも岡山大学としてどのような語学教育が必要なのか、全学的なコンセンサスが得られていないような気がします。各学部の要望を出し合って、実用英語でいくのか、その他の外国語はどうするのかを明確にしたうえで、その人員はいかに確保するか、組織はどうするか(たとえば外国語センター)、また文学部はどれだけ貢献するのかなといった議論になるのではないかと思うのです。たんに英文学出身者ではなく・ネイティブとかアメリカの大学で文化人類学やマイノリティ民族論などを学んだ人も活用すべきでしょう。大学として必要と判断すれば、そのためにポストをさくことも辞してはならないと思います。

6 情報教育

全学の情報教育がどうなっているのかは視察できませんでしたが、文学部においても情報処理能力の育成は、欠くべからざる、緊急の課題であろうかと思えます。そのための設備と人的措置は、はっきり言って貧寒たるものです。4年間のうちにコンピ

ユーザー操作の能力をつけさせることを学部の基本的教育方針のひとつに掲げ、そのための設備と人員確保にいますぐにも着手すべきでしょう。

L.L とともに、若い教官のボランティア的使命感に頼っているだけでは、学部の現代的課題と社会の要請に対する姿勢が問われることになります。

このことは強く申しあげておきたいと思います。

(6) 国際交流

国際的に開かれた大学は、必須の現代的課題でもあります。広島大学では留学生の数が全学で 700 名以上、単純に比較するわけではありませんが、岡山大学はもっともっとアジアをはじめ諸外国に開かれてもいいのではないのでしょうか。

文学部においても、学部としての提携校をさらに増やし、学生と教官の相互交流、共同研究をいっそう推進する必要があると考えます。

外国人教師ではない、国立大学教官としての外国人教官の数もさらに増やすべきでしょう。

(7) 総合的な教育

現在、あらゆる学問・研究が専門化、細分化の一途をたどっていることは必然の状況であります。そうであるならば、そうであるがゆえに、一方では全体を見通す視野の広さを身につけさせる教育が必要かと思えます。『報告書』においても、大講座の理念としてうたっていますが、実際のカリキュラムでこの点がよく見えてこないのは、私の眼力のなさのせいであればいいのですが。

またある現代的なテーマにさまざまな専門分野から切り込んでいく総合科目は、教養教育のひとつの中心だと思えますが、文学部が関与する教養教育について言及がないのは残念です。

(8) 学生生活

『報告書』の学生に関する調査で、脱力感・無力感を訴えている学生が多いことに傍然としました。いま、日本は中高年の自殺が 3 万人という世界史のいかなる時期にも見られない、異常な状況を呈しています。その理由をいろいろとあげつらうことは容易ですが、これこそ対症的に対応すべき事柄でしょう。具体的には、『報告書』にありますように、喫緊の課題として、全学的にカウンセラーの充実を考えるとときだと判断いたします。

なお、学生の現状をよりの確に把握するために、さらにきめこまかい調査をされてはいかがでしょうか。

(9) 大学の自治、学部長の役割

『報告書』で見る限り、総じて、旧来の大学自治の思想にとどまっているという感を強くもちました。

学部長のリーダーシップについて言及がありますが、たんに個人の能力に期するだけで

なく、リーダーシップを発揮できるような制度上のなんらかの措置が必要ではないでしょうか。

また教授会を最高の意思決定機関と規定するだけでは、いまや不十分な状況になっています。教授会で決定する部分と、学部長の裁量に委ねる範囲の区分けが、制度として必要になっていると思うのですが。

学長と評議会の関係についても同じことが言えるでしょう。

(10) 教育評価

教育、研究、大学(学部)運営がいまや教官の仕事の三本柱であります。教官の評価が研究のみによってなされてきたことが、教育への配慮が十分でなかったことの原因だとする批判が、社会には当然ながらあるようです。

教育評価をいかに行うか、なかなか困難な問題だとは思いますが、試行錯誤を繰り返しつつ、学生による評価も視野に入れながら、辛抱強くあるべき姿を追求すべきでしょう。行政法人化に先だって、大学としては手をつける課題ではないかと考えます。

最後に、社会の趨勢、また社会の要請に積極的に応じていく姿勢、あるいはこれを先取りして、絶えず積極的に自己改革していく姿勢が、『報告書』において示される必要があるかと思えます。

大学の自己点検・評価も緒についたばかりだと思えます。今後も点検→評価→改革というサイクルを粘り強く続けていかれることを切望いたします。

必ずしも的を得ていない、たんなる感想に終始したことをお詫びしつつ、つたない私の報告を終わらせていただきます。

外部評価への対応

1. 教官組織

[評価]

大講座への改組に伴い、講座の名称・理念も、英語圏言語文化論講座及びヨーロッパ言語文化論講座へと拡大されたが、依然として改組前の小講座の体質が残っており、教官組織・教育内容の現状はいずれもその名称・理念に見合うものになっていない。

[対応]

現状では、大講座の名称・理念を十分に体現する教官組織・教育内容でないことは認めざるを得ないが、改組等の経緯もあり、やむを得ない部分もある。当該各講座では、不十分ではあるが、現在つぎのような努力・工夫をしている。英語圏言語文化論講座では、非常勤講師枠を用いて『世界の英語』を開講し、英語圏におけるさまざまな英語の姿を紹介したり、また採用人事に当たって、旧来の英米文学の枠を多少とも拡大する方向で教官採用を行った。ヨーロッパ言語文化論講座では、『ヨーロッパ文化交流論』を開講し、また一方で日本文学のスタッフも参加しての言語・文化の枠組みを超えた講義を展開するなど、学生に対し多様な視点の提供を心掛けている。またロマンス語圏では非常勤講師枠を用いて『スペイン語』の講義を10年来開講し、ゲルマン語圏でも同じく非常勤講師枠を用いて『イディッシュ語』の講義を開講している。さらに来年度からは専任教官による『オランダ語』の開講も予定されており、ゲルマン語圏・ロマンス語圏の言語・文学・文化の幅広い紹介につとめている。

現在の大学のおかれている状況を考えれば、現状を放置し、次回の外部評価で再び同様の指摘を受けることが決して許されないことは言うまでもないが、目下文学部では、学部・大学院の改組等が検討されており、これによって言語文化学科全体の改編がもたらされる可能性もあるので、その動向を見極めながら、当該各講座の将来像を真筆に検討して行きたいと考えている。

2. 研究

特に指摘された点はない。むしろ悪条件の中で研究業績を上げている点を積極的に評価していただき、今後の励みとしたい。

3. 教育

[評価]

いくつかの指摘を受けており、以下に列挙する。

- () 学生の多様な要求に見合う教育が行われているか。
- () 実用言語教育の導入・推進を図るべきでないか。
- () 教養教育の理念と文学部の役割を明示すべきでないか。

- () 全学の語学教育をどのように考えるか。

[対応]

以下に評価の番号順に実情並びに対応を記すことにする。

- () 従来の文学関連講義以外にも、映画、オペラ、SF/ミステリー、TV コマーシャルなどを対象とした講義が開講されている。また FD 委員会等の設置によって、さまざまな教育の工夫が図られている。

- () 実用言語教育の導入

各履修コース所属の外国人教師による、会話・作文等の授業が開講され、当該言語の運用能力の向上が図られている。検定試験については、英検 2 級、仏検 2 級、独検 2 級の取得をそれぞれ目標にしている。実用言語教育は、学生の関心も強く、今後一層の充実を図って行きたいと考えている。

- () 教養教育の理念と文学部の役割

文学部全体の対応策の一環として考えるべき問題であり、個別学科の項目では扱わない。

- () 全学の語学教育

全学の語学教育をどのように考えるかについては議論の多いところであるが、言語文化学科では全学の語学教育は少なくとも以下の要請にこたえられるものでなくてはならないと考えている。(イ)学生が当該分野の専門知識を身につけるのに必要な専門語学力の提供。(ロ)国際社会に対応できる実用レベルでの言語運用能力の提供。(ハ) (イ)及び(ロ)の外国語能力を適切に習得するために必要な言語・文化の背景知識、並びに言語の構造に関する一般的知識の提供。上記 3 点の要請に対して、言語文化学科は(ハ)については十分責任ある対応ができると考えるが、今後は(ロ)に関しても貢献ができるようにして行きたいと考えている。

4. 国際交流

[評価]

留学生の受け入れ拡大、提携校の増大、学生及び教官の相互交流、共同研究の一層の推進を図るべきでないか。

[対応]

指摘の通り、過去数年の留学生の数は減少傾向にあるが、これは近年奨学金確保等の経済状況が大変厳しくなったこととも関連しており、一概に受け入れ校だけの問題とは言い切れない面もある。英文では、米国のボール州立大学と提携し、毎年 1 名の留学生を送り出している。独文では、ロータリークラブ等を利用して、毎年 1 名の留学生をドイツ・オーストリアに送り出している。仏文では、短期または長期の留学生(私費及びロータリークラブ)を毎年数名送り出している。また言語文化学科では、独文・国文の教官を中心とする洋学資料の研究グループによる異文化交流研究も活発に行われている。

日本への留学生の多くは日本の言語・文学・文化の研究を希望するため、ヨーロッパ系への留学生の受け入れ数は少ないが、ドイツ、フランス、英語圏の留学希望者を積極的にアジア系講座に紹介する等して、国際交流の推進に役立てたい。

今後はさらに提携校の拡大と留学生の送り出しに努め、また外国人研究者を短期・長期を問わず積極的に招聘し、共同研究化を推し進める等、学生・教官共に一層の国際交流の推進に努めて行きたい。

5. 施設

[評価]

情報処理教育は現代社会の強い要請であるにもかかわらず、そのための十分な設備と人的措置が準備されていないのではないか。

[対応]

文学部の情報処理教育・施設が完備していないとの強い指摘はそのとおりである。現在1クラス編成分程度のPC貸与の希望を情報処理センターに提出中であるが、LL及びPC設備の充実と人的措置の早い対処が望まれる。言語文化学科では現在数台程度のPC設置スペースしか確保されていないのが実情であるが、今後文・法・経三学部共用敷地内に建設予定の放送大学関連施設、並びに文・法・経三学部共用研究棟を借用する等して、LL及びPC設備の充実を図って行きたいと考えている。

6. 特記事項

特に指摘された点はない。

7. 将来展望

[評価]

大学が変革を迫られている現状を正しく認識し、社会の要請に対して積極的に大学の新しい姿を提示して行くべきである。

[対応]

上記評価に対する詳しい対応は文学部全体の対応策の項目で扱う。言語文化学科(ヨーロッパ系)では、今後情報処理教育の重要性を一層認識し、その充実を図ると共に、実用語学能力と専門知識を兼ね備えた、国際化時代に対応できる学生を社会に送り出して行かなくては行けないと考えている。

言語文化学科
(アジア系)

言語文化学科(アジア系) 外部評価の日程と方法

11月4日(木)

15:00 - 15:10 文学部長・評議員との懇談

15:10 - 16:00 言語文化学科(アジア系)の紹介

文学部会議室において、対象講座教員全員が参加のうえ、工藤教官が学科の沿革と現状について説明をし、その後質疑応答と意見交換を行った。

16:00 - 17:00 附属図書館の見学

言語学・日本語・日本文学・中国文学などアジア系蔵書を中心に書庫を見学した。また雑誌の配備具合を確認の後、学生用オープン書架を見学した。その後、貴重書文庫(池田家文庫)、旧六高蔵書などを視察した。

11月5日(金)

9:00 - 11:00 文学部言語文化学科(アジア系)各講座の教員及び学生との面談

9:00 - 9:40 言語学講座(対照日本語学履修コースを含む)

学部学生・大学院生・講座の教員全員が参加して、講座の沿革と現状を説明し、質疑応答と意見交換を行った後、学生・院生演習室等関連の施設を見学した。

9:40 - 10:20 日本言語文化論講座

学部学生・大学院生・講座の教員全員が参加して、講座の沿革と現状を説明し、質疑応答と意見交換を行った後、学生・院生演習室等関連の施設を見学した。

10:20 - 11:00 アジア言語文化論講座

学部学生・大学院生・講座の教員全員が参加して、講座の沿革と現状を説明し、質疑応答と意見交換を行った後、学生・院生演習室等関連の施設を見学した。

11:00 - 12:00 中野委員による講評(文学部会議室)

学部長・評議員・自己評価委員長・言語文化学科の教員が参加し、中野委員による講評の後、質疑応答と意見交換を行った。

12:00 - 13:30 学部長・評議員などとの懇話会兼昼食

13:30 - 15:00 中野委員による講演「文学部の未来」(文学部会議室)

学部長・評議員・自己評価委員長・文学部教官が参加、中野委員による「文学部の未来」(概要は後掲)という講演を行った。講演の後、意見交換を行った。

言語文化学科(アジア系)評価報告(中野三敏委員)

1. 教官組織

旧教養部教官を受け入れた際の事情もあろうが、アジア言語文化論の3人はその名称に比して極端に少なく、しかも分野が偏っており、言語学の6人はそれに比べて極端に多いという印象を受けた。言語学6人の中には日本語・朝鮮語などアジア言語文化にふさわしく、また日本語・日本文学と領域の重なる方もあるようなので、言語学・アジア言語文化論・日本言語文化論の三者で教官の組織を再編するなり、垣根を外してみてもどうかという印象を持った。

教養部改組によって、文学部へ移ってこられた中で、文学部の教育に全く携わっていない方もおられるように拝見されるのは、本人の問題なのか、受け入れ側の問題なのか、疑問に思った。時間を重ねて解消すべき問題とは思われるが、そのことが講座の運営などに影響を与えていないものかどうか、危惧された。

アジア系を概観するかぎり、教官組織がうまく配分されているとは、必ずしも言い難い印象を持った。

2. 研究

岡山大学文学部では教授昇進のためには著書が必要という内規があると仄聞した。その意図はまことに結構だが、業績を拝見するに、いささか著書のための著書、すなわち極めて形式のための著書になってはいないかという思いがする。

また論文の数は多いほど良いというものではさらさらないゆえ、過去5年のうちに紀要が2・3本というのは致し方ないことかもしれぬが、極めて例外的に皆無という場合、その理由が知りたく思った。特別な事情がある場合には(例えば病気であるとか、学部長に在職したであるとか)、その理由を明記していただいたほうが、外部の人間には有り難い。

こういった諫言をさせていただくのは、ひとえに大勢としては良好で、活発な研究活動をなさっているように見受けられるからであり、僅かなマイナス点によって全体が悪く印象づけられるのを恐れるためである。

3. 教育

後述もするが、劣悪な環境(ハード面)の中でよくぞやっていると感じた。しかるに、これは一般論として聞いていただきたいのだが、学生の質が変わりつつあり、社会全体が知識を軽んずる傾向のある今こそ、カリキュラムや教育方法、ソフト面に一考の余地があるように思われる。特に学問、平たく言えば知識への欲求・動機づけに工夫を凝らす必要がありそうである。これは言語文化学科全体で、学生のみならず、社会全体にアピールすることが望ましい。

また動機づけは、学生レベルの低下に迎合して、教育のレベルを落とすということではない。最も重要なのは入試である。昨今、学生を沢山集めるために、入試科目を削ったり、

試験を多様にし、学力試験以外の試験を導入するといったやり方が多数見受けられるが、果たしてそれで良いものだろうか。医事都などで入試科目から生物を削って、逆に大学で高校の生物を教えるなど、本末転倒、愚の骨頂ではなかろうか。大学の入学時点で必要となる基礎や教養は当然、入試に課すべきである。文学部でも同じようなことは生じていないだろうか。言語文化学科に日本史や東洋史の知識は不要なのであろうか。真剣に議論していただきたい。

また『自己点検・評価報告書』を拝見するに、文学部各学科の受入れ数(図書)の言語文化学科の欄が平成 8・9・10 年と、年を追うごとに減少しているように見えるのが、大変、気になるところである。人文系の学問の基礎は図書であり、これを積み重ねていくことが学問の歴史の反映である。コンピュータなるものは数年すれば古くなり、使い物にならなくなるが、書籍は今後数十百年にわたり利用されるものである。それが減少しているとなると由々しき問題である。予算が少ないということならば、正当な要求を絶えず行い、また他大学でも多く見られるような実験講座の協力を得て図書を充実させるなどの必要がありはしないか。

4. 国際交流

まず第一に日本文化や日本の社会、日本語、日本の文学、宗教などを海外にむけて正確に発信することこそが、国際社会において、日本に求められていることであると思う。英国人が日本人から知りたがることがあるとすれば、シェークスピアではなく、『源氏物語』であり、英語ではなく日本語であることを肝に銘ずるべきであろう。その点では、教官の研究・教育活動をより活発化することと留学生の受け入れの物理的環境をより整備することが、何よりも大切であろう。

そこには勿論、道具としての語学が必要であるから、日本語や日本文学に携わる教官は語学の教官と協力しあうという姿勢も必要かと思われる。

次に海外の文化を国内にむけて正確に紹介することも重要であるが、この点からすれば、対象となっているのが、講座や教官を通覧して、イギリス・アメリカ・ドイツ・フランス・中国(以上は講座)・韓国・トルコ・フィリピン(以上は教官の専門)・ロシア(非常勤講師)というのは、やや狭く、偏っている印象を受ける。アフリカや南米、北欧などにも目を向ける必要はないか。

5. 施設

内部の部屋を拝見するに、大変、手狭であるという感じを受けた。私が唯一、九大と比較できる日本語日本文学の演習室は、1 学年 20 人として 4 年生までで単純計算しても 80 名が入るとは到底思われぬ。一步譲って人間だけの話であるならば、大講義室に押し込めば済むのであるが、人文系の傘ともいべき図書の配架場所すらないのは、国立大学がいかにも劣悪な環境に置かれているかを物語る良い例である。大学院生の部屋と別々になっているというのも大問題である。教官と学生の間物理的・恒常的に大学院生が入ることで、学生も育ち、院生も勉強になるということが極めて多いはずである。

6. 特記事項

現在の国立大学の学生のレベルは、私立大学のそれに比べて、なお明確に良好なものである事は確実である。岡山大学も無論、その例に漏れるものではない。今後いかにしてこのレベルを維持し、又レベルアップを図り得るかが最大の懸案であり、その為には入試に関して、より真剣な議論が尽くされるべきであろう。

7. 将来展望

文学部の将来は極めて明るい。それは逆説的な言説と受け取られるかもしれないが、実は物質文明が飽和し、社会が老齢化する、これからが本当に文学部が必要とされる時代なのである。

社会全体に、知識に対するあこがれ・尊敬といったものが薄れている昨今(端的には若者の読書量をみよ、近年の出版界の不況を見よ)、文学部こそがその風潮に対するアンチテーゼとして存在しているのであり、また確実な展望を与え得る唯一の存在であることを、教官は自覚しなければならないのではないか。

外部評価への対応

1. 教官組織

[評価]

講座の名称に比して、その講座を構成する人員や分野に偏りが見受けられる、という指摘を受けた。また教養部廃止にともなって移籍された教員と受け入れ側との関係についての疑問が出された。

[対応]

教養部廃止にともなう文学部改組によって、講座の名称を変更した。またその際の教員の受け入れ人数に大小があったため、指摘のとおり、講座の人数や内容のバランスに欠ける部分があることは否めない。現在、改組を計画しているので、講座の統合などの手段によって、人数のバランスなどの部分は是正していきたいと考えているが、講座の内容に関しては従来の教員で構成するかぎり、急激かつ大幅な変更は今のところ必ずしも容易ではない。

言語文化学科がどのような未来像を描くか、そしてその実現のために講座がどのようにあるべきか、という理念を学科や学部で機会ある毎に話し合い、そうした将来展望のもとで人員配置や研究分野について実りある方向を目指していきたいと考えている。

なお、教養部から文学部に移籍された教員のうち、少なくともアジア系に関するかぎり全員が専門教育に携わっている。

2. 研究

[評価]

教授昇格にあたり学術書の単著が必要という慣行はやや形式的すぎるのではないかという指摘があった。全体的には研究業績は大変良好で、活発な研究活動が行われているという高い評価を得られた。

[対応]

学術書の単著の指摘について。これは内実を高めるため、古くより行われてきた努力の一環であって、むしろもたらされた成果のほうが大きいと考えている。

勿論、今回の指摘を真筆に受け止め、今後、一層自らを高めていく必要がある。研究成果の学会発表、審査制のある専門雑誌への掲載、学会で評価される著書の公刊など、これまでも当然の目標としてきたことを改めて自らに課し、更に高い研究水準を目指して努力していきたいと考えている。

3. 教育

[評価]

カリキュラムに工夫が必要である，入試について良く考える必要がある，図書購入が減少しているのは問題である，という指摘を受けた。

[対応]

カリキュラムについては言語文化学科では次のような工夫を行っている。「言語文化学入門」という科目を新設し，1 年次前期に各講座が講座内容などを紹介している。内容を知ることが出来た，大学入学まで知らなかった分野への興味が湧いたなどのアンケート結果が得られており，学生には概ね好評である。

しかしこうした工夫の余地は他にもあると思われる。具体的には教養部廃止にともなって，学部一貫教育に移行したが，カリキュラムをどのように編成すればより効果的な教育が可能か，各講座などで考えていくべき課題のように思われる。

また就職活動が早まり，3 年次後期から卒業年次にかけて就職活動の占める比率が高くなった。この事態に対してどのように対応すれば，従来の教育レベルを保持し，更なる展開を可能となしうるか，これもまた今後の検討すべき課題である。

入試については以下のように考えている。科目に，たとえば社会を導入する点，日本語文化論講座では日本史が，ヨーロッパ言語文化論講座では西洋史が必要だという賛成意見がある一方で，科目が増えるのは負担が多すぎる，記憶重視の入試は不要であるという反論も提出され，今後，学科において更に検討していきたいと考えている。

勿論，科目といった表面上の問題にとどまらず，入試そのものをよく考えるように，という示唆と寒け止め，今後どのような学生を受け入れ，育てようとするのか，未来にむけて学部・学科内で話し合っていきたい。

個人研究費で PC(パーソナルコンピュータ)を購入することに対して疑問が出されているが，現代では PC の活用は必須となっているので，情報処理センターの端末設置の更新を利用して学生向けの PC を充実させることを考えている。また科学研究費などによって個人研究費を充実させ，個人が使用する PC はそちらで賄うということも重要な措置である。この点に関しては，近年，科研費への意識は高まっており，説明会などを開催して応募の促進をはかるなどの努力をしている。

図書の購入が減少している点は，積極的な大型図書の申し込み，予算配分の見直しの要求などを通して，是正をはかりたいと考えている。

4. 国際交流

[評価]

日本文化の発信に努め，教官の教育活動の活発化と留学生受け入れの物理的環境の整備が必要であるという指摘を受けた。

[対応]

日本文化の海外への発信という指摘に関連して、ヨーロッパなどでは、日本文化研究のために来日したいと思っている研究者がいるが、こういう要求に日本文化関連の教員は応ずることができるのかという提議が学科内でなされた。この種の提議が学科内で行われたこと自体が初めてであり、それだけでも大変有意義な指摘であった。

この提議に関しては、契約が細部にまで涉ることが障害になること、大学宿舎が劣悪で招聘して使用してもらいに耐え難いことなどの物理的要因があるものの、情報の提供を受ければ具体的に検討を行ったり、或いは、個人レベルに留まらず、学部全体で海外の提携大学を広げるなどの努力をすべきであると考えているに至った。

特に提携大学については、言語文化学科(アジア系)のみの問題ではない。文学部全体で一校のみであり、大変貧弱であることは否めない。平成 11 年 9 月に岡山大学総務部国際交流課によって纏められた「国際学術交流ハンドブック」などを手引きにして努力していきたいと考えている。

学生の留学の状況は次のようである。アジア言語文化論講座では毎年のように学部学生が積極的に中国へ留学している。平成 8 年度 4 名、9 年度 1 名、10 年度 3 名、11 年度 5 名といった具合である。この中には岡山市の交換留学生として行った例もあり、語学の習得とともに国際交流の一翼を担っていると言えよう。こうした営みは今後も是非継続していきたいが、前述のように外国の大学と提携を結び交流を深めるなどして、環境を整え、積極的に制度そのものから支えていく方向で考えている。

教員の国際交流については次のような状況である。科学研究費を受けて言語調査をしたり(トルコ)、学会発表のために海外出張する(トルコ、韓国、中国など)教員もあり、国際的な文化交流の一翼を担っている。今後もこのような活動を継続していきたいが、特定の教員だけに偏らないようにする必要もあると考えている。

海外からの留学生の受け入れについては次のようである。日本文化研究の担当講座では留学生を積極的に受け入れており、一例として日本語日本文学関係では平成 11 年度 3 名、10 年度 1 名、9 年度 3 名、8 年度 3 名の修士課程修了者を出している。こうした修了生の中には日本の近・現代小説を翻訳して母国に紹介する(例えば本学修士課程修了者による台湾語訳『村上龍料理小説集』台湾草石堂出版社)など、研究活動の一部が自ずから日本文化の発信に寄与した例も少なくない。

また日本語研修生や学部留学生も積極的に受け入れている。こうした留学生のために、留学生担当講師によって日本語・日本事情のカリキュラムが生まれ、留学生センター(全学共通)ではあまり行われていない上級レベルの日本語教育が行われている。

留学生担当ポストが他教科に流用されているという実態の報告もあるそうだが、それらと比較すると正しく運営されていると考えている。しかし残念なのは留学生担当講師のポストが講師職に固定されていることである。このために、優秀な教員が昇格の機会を与えられずに、他大学へ転出してしまうという結果を招いている。継続的、かつ円滑な国際交流が行われるためにも、教授ポストを要求するなどして、環境の整備に努めたい。

5. 施設

[評価]

演習室が狭い，院生と学部学生が離れた別室で勉強していることは教育上良くないという指摘を受けた。

[対応]

演習室が狭いという指摘については，文・法・経の在籍学生数 1 人当たりの面積が全学平均の半分であることが判明しており，指摘のとおりである。建物の新設・増設をまって，文学部全体で対処すべき問題と思われる。文学部でも予算要求を絶えず行っている。

近い将来では文・法・経三学部共同研究棟が設けられる予定なので，その利用について文学部全体で考えていきたい。

院生と学部学生が交流できるように，演習室が隣接する必要があるという指摘は重要である。建物との関係で即座に改善するというわけにはいかないが，上記の三学部共同研究棟新設の際には，研究のしやすさを支援するという観点などからも施設の運用を考えていきたい。前述の学生 1 人当たりの面積を拡大し，院生と学部学生が交流できるような部屋配置なども考えていく必要がある。

6. 特記事項

[評価]

入試について更なる議論が求められた。

[対応]

入試のあり方については，各種委員会で推薦入試や AO 入試などが検討され，今後，学部内で討議が行われると思われる。その際，岡山大学ではどのような学生を期待しているのかという点，深く議論していくつもりである。

また科目については「3. 教育」で述べたように学科で検討していきたいと考えている。

7. 将来展望

[評価]

大学における文学部というものの存在意義について非常に重要であるという自覚を持つように指摘された。

[対応]

教員自らにおいては，文学部の存在意義については十分自覚していると思うものの，それを外部に積極的にアピールしてきたがと内省するに，必ずしも十分ではなかったがもしれないという思いが生ずる。こうした事実反省を迫る指摘として謙虚に受け止めたい。

文学部

文学部 外部評価への対応

1. 教官組織

教官組織と旧教養部問題の解決

旧教養部教官の文学部への配置替えに起因して、文学部の教官組織が教育研究の観点からして一部整合性を欠く現状にあることは、自己点検・評価報告書で詳しく述べた。今回、外部評価委員からもその点の是正について、率直な意見をいただいた。とりわけ旧教養部外国語教官ポストの配置に問題が多い。「配属教官の視点からすれば不本意配属以外のものではない」、「教官サイドにあった旧教養部と学部との間の格差意識が、学生の感覚にいまなお残照しているのではないか」(吉田委員)などの指摘を重く受け止めたい。

当面、学部としては「時間による解決」という消極的対応のみでなく、「内部調整・内部努力による権利・義務の最適化」に、さらに積極的に取り組むこととする。

この問題を抜本的に解決するためには、学部改組により、学科・講座間における教官数の不均衡の是正や、教官の専門に即した学科・講座への配置を実現していく必要がある。今後の本格的な改組の検討に当たっては、たんに旧教養部教官ポストの問題を解決するというにとどまらず、本学部の理念にのっとり、新たな学科や講座の再編成も視野に入れながら将来構想を考える姿勢をとることとし、構想の実現については5年以内をめどとしたい。このような将来構想を検討して行くには、本学全体の教養教育における授業分担との関係を調整しなければならないが、従来のように全学の教養教育のシステム改善を待つだけでは、本学部固有の問題の早急な解決は困難であろう。本学部の望む将来構想を明示し、全学の協力も求めつつ、主体的に改組の実現を目指すことにしたい。

教官と学生

世代間の自然で円滑な交流が研究教育の大きな推進力を生むという意味で、若手教官の確保が必要である。そのためには助教採用のみに資格年齢に配慮するなどの工夫を行いたい。もし必要な場合には全学の了解を得つつ助教ポストの流動的な活用も考えていきたい。また助手の要求が不可能な現在、これに代わる有効な方法として、提言された「TA(ティーチングアシスタント)の活用」や「RA(リサーチアシスタント)の活用」(眞方委員)といった制度の活用を初めとし、大学院生と学部学生との交流(中野委員)を積極的に進めていきたい。

2. 研究

業績

研究業績についてはおおむね高い評価が得られたが、論文の発表の場を審査制度のある学会誌にさらに広げるなど、業績内容を一層広く日本と世界の学界に問うことを基本的な姿勢としたい。研究費の確保のためには、科学研究費などの補助金を中心として各教官の研究内容に即して工夫しながら、種々の機会に積極的な申請をしていく必要がある。

研究分野

4 学科にわたり、人文学と経験科学の両面にわたって研究を進めている文学部の姿勢は、高く評価された。

言語文化学科のアジア言語文化論・英語圏言語文化論・ヨーロッパ言語文化論など広域的な名称を持つ講座では、現在の各講座が担当している研究領域の狭さが指摘された(戸田委員)。広域講座名称の持つデメリットの指摘である(中野委員)。以上の指摘に対して有効に対処出来るのは各研究分野の積極的な共同と融和であろう。たとえば言語文化学科の報告に見られるような履修コースを超えた教官同士の共同研究や共同授業が多数行われることが望ましい。コース間ばかりでなく学科間の、場合によっては学部間の垣根を取り払って、自由な発想に基づく研究教育を実現していきたい。

広域的な名称を持つ講座の教育研究領域を拡大するため、新たなスタッフの採用を行う際に、従来とは異なった領域の専門家(外国人教員を含む)を公募する方向も検討していきたい。

3. 教育

授業の工夫

前述した研究との深い関連において「横断的な教育研究分野の開拓」(眞方委員)や「ディシプリン相互浸透的な再編」(吉田委員)といった観点から実際の教育を見直していきたい。そうした理念を元に、授業内容を再検討していくとともに、それに見合った具体的な授業運営の実現を図りたい。たとえば短期集中型の授業時間の割り振りや、内容に応じて有効なノルマコマ数の配分などである。教官個々人の努力はもとより、学部全体にわたっての組織的制度的な工夫が必要であろう。文学部ではすでに FD 委員会(教育方法改善委員会)が承認され発足している(平成 11 年 11 月教授会)が、これからの文学部を考えていく場合、当委員会の持つ意義は大きいと考えている。

学生

卒業論文の指導に代表されるように、文学部教官の学生に対する研究指導は充実していると考えられる(森委員)。学生の研究意欲をさらに引き出すため、彼らのふだんの生活と精神面への配慮を充実していきたい。具体的には教官全員がそれぞれ学生との自由な面談時間をもうけるなど、積極的な働きかけを実行して行くつもりである。

文学部の特徴として“少人数教育”があげられる。私たちが努力さえすれば、十分目と心の行き届いた指導が可能はずである。

入試

学生の基礎学力に関連する入試科目などの再検討(中野委員)は、専門性の違いを考慮して各学科でそれぞれなされることが望ましい。たとえば平成 12 年度入試として人間学科が行った推薦入試を、他学科でも検討していく。センター試験の独自の活用方法を考えることや、選定図書を元にした試験を課すなどの工夫が必要であろう。また高校での出張授

業や、高校生を大学の授業に参加させる`“体験入学”などのふだんの広報も含め、多様な方法に基づく入学者選抜に努めたい。

4. 国際交流

指摘(中野委員)のとおり日本文化研究の担当講座が中心となって、留学生受入れについてその物心両面にわたる充実を図っていく。

教官の国際的な交流(派遣と招聘)には、現在予算的な措置が伴わないといった不自由さがあるが、制度的な面での充実を図り、その発展を目指したい。

また学生の海外留学については、その動機付けとして、現在行われている単位認定をさらに進めて、単位の互換を中心とする大学間交流といった制度面を整えるなど、留学生がその留学期間を無駄にしないような積極的な支援を実現していきたい。

5. 施設

文学部ではこれまでもあらゆる機会をとらえて施設の改善や確保の努力をしてきたが、各委員に種々指摘されたとおりの現状である。ただし、平成 11 年度補正予算では文・法・経三学部共用の総合研究棟が設置されることとなり、問題の一部は解決する見込みである。しかし、施設の維持費や老朽化に伴う修復費の予算化など、大きな問題が残っている。これからは自己評価・外部評価の結果などをもとに、概算要求の中で施設の充実をさらに目指していきたい。

6. 将来展望

具体的な事柄から述べれば、現在大学院は区分制大学院に移行すべく、改組を検討中である。これに伴う学部の改組の過程で、今回の評価で指摘された様々の点を改善していきたい。また高い評価を受けた点についても、さらなる進展を期して検討を深めるつもりである。

「文学部の将来は明るい。それは逆説的な言説と受け取られるかもしれないが、実は物質文明が飽和し、社会が老齢化する、これからが本当に文学部が必要とされる時代なのである。」(中野委員)という言葉をかみしめながら、勇気を持って進んでいきたい。改革の実現は、ひとえに私たちの意欲にかかっていると考えられる。これまで対応としてあげてきた数々の課題の実現といった内部努力、そして全学あるいは社会に対して積極的に働きかける姿勢が必要とされている。地道な努力を重ねることで、また岡山大学の「筆頭学部」の誇りを持って、わが文学部の未来を切り開いていきたいと思う。

講 演

「文学部の未来」

中野三敏

ただいま御紹介いただきました中野でございます。「文学部の未来」という、大変大きな題でございますが、実は岩波のブック・レットに『讀切講談・大学改革』という文章を書きましたが、そういうこともあって、何かそれなりのことをということになったんだと思います。

大学改革 ・その後

あれを書きました頃は、まだ嵐も途中経過の状況のときでありまして、したがってああいう文章にもなりましたが、その後、大学改革はほとんど終わったと言ってもいいような状況になっておりますので、今回はその後に来るもの、そういう事柄で、思いつく限りのところでお話しをしてみようかと思っております。

大学改革がもうほとんど終わってしまって、一種の脱力感が一時ありましたが、それではいけないと思い、去年の暮れから今年の初めにかけて、私どもの方で日本文学関連学会連絡会議というものをつくり、文部大臣やそういう方々へ声明文をお送りしたりして、アピールをしてきております。今もまたその中途でありまして、そのこともきょうはちょっとお話しをして、御賛同をいただいて、できるだけ大きな声にしていきたいというふうにも思っております、この今日のこういうお話をお引き受けしたりしたわけでもございます。

大学改革というものにかかわってきて、そして現在に至って、それがどういうことだったのか、それからまた今後どういうふうなことが問題になってくるのか、というようなことを何がしか考えてみました。

大学改革 ・その内実

その場合に、例えばこの岡山大学の場合だと、恐らく教養部がなくなったということ、それから大講座になったということ、そういうことが恐らく大学改革の動きとして順次に起こってきたことだと思います。大講座になったということも、結局は教養部がなくなったことによっていわば波及的にそうやっていったというのが実情だろうと思います。

ただ教養部をなくしましたときも、これはどこの大学も皆そうだったわけですが、とにかく教養部はなくすということが先行してしまい、本当の意味での教養教育というのが一体どうあるべきなのか、何なのかということは、恐らくほとんど議論はされていないのではないかと、思います。

と申しますのは、恐らく当事者にとっては、これは余りにもわかりすぎるほどわかっているものだから、かえって議論も何もできなかったということでもあったらうかと思えます。その結果、教養部はなくなりました。そして、そのために組織をとにかくいろいろといじらなければならないということに当然なったわけでもございます。組織の改編とでも申しますか、それが大学改革だというようなことになってしまった、その辺にやはり日本の大学改革の大変貧しい部分がもろに現れてしまったと思えます。

要するに、内発性はほとんどないままに、いわばリストラの一つとして組織いじりをやる、そしてその組織いじりがいわば大学改革だというような図式ができてしまった。これはまことに大学らしからぬことをやってしまった。大変忸怩たる思いがいたします。そのときに、本当の意味での内発的な改革がもしできたならば、大変大きな意味があったに違いないと思いますが、しかしそれはできなかったとしても今後やればよいということでも

ありますので、そういう意味では本当の大学改革というものがこれから始まるというふう
に考えてもよろしいのではないがとも思います。そういう意味で、この岡山大学文学部の
未来ということもそこにかかってくるかとも思っております。

予算の 本質と実態

組織を変えるということが出てきたのは、いろんな事情があったとは思
いますけれども、一番大きく作用したのは予算のことです。つまり、予算
が増えない、予算を増やすにはどうすればいいか、それは組織を変えなけ
れば増えないという、つまり前年度と同じことをやっていけば前年度と同じ予算である、
変わっていればその変わったところを査定して、予算をつけましょう、増やしましょう、
それが予算策定の方針なんです。道路工事や都市計画というようなことであればそれは大
変よくわかります。新しい橋をつくります、あるいは大きな堤防をつくりましょう、干拓
工事をやりましょう、それがその全体にとってふさわしいものであるならば、やるのも当
然、予算をつけましょう、となる。

それは当たり前のことだと思えますけれど、それを教育や研究、つまり大学の予算にま
で適用されるという、この不思議さと乱暴さ、それがそもそもの問題点であったと思いま
す。

要するに、文学部は、もともと慢性的に予算が窮屈であった、何とかして増やさなけれ
ばならない、増やすためには今までと同じことをやっていたのでは増えない、そうすると
何か新しいこと、どこかを変えるというようなことが当然考えられる。それを実際に行う
ということが大学改革だったということになってしまったわけでありす。

変えなければいけない部分、あるいは変えた方がいい部分、あるいはどんどん新しくす
る方がいい、そういうところはもちろん新しくする方がいい。これは当然のことでありま
す。大学にもいろんな部署があり、いろんな領域があるわけですから、当然のこと、新し
くした方がいいところはどれだけでも新しくすればいい。それは恐らく応用学の領域にな
ることは当然のことでありす。

例えば九州大学にも石炭研究所、石炭学などというものもありました。石炭をほとんど
掘らなくなり、作らなくなり、使わなくなれば当然それは捨てて、またさらに新しいエネ
ルギーの研究というのが始まるのは当たり前のことですから、そっちへ移行する、新しく
する、ということはもう当然のことでありす。

「土台」としての 文学部

しかし、変えてはいけない部分というのが必ずあるはずす。そ
の変えてはいけない部分を変えてしまうということは、これは大変
大きなマイナスの意味を持ってしまう。その変えてはいけない部分
は、これが文学部のような学問、研究の領域、あるいは教育の領域、ここにほとんど集中
していたはずだと思えます。要するに、その基礎の学問というのは変えないからこそ基礎
であって、変えてしまえるのだったらそれは基礎でも何でもありません。その変えては
いけない部分を変えてしまおうとしたところに、今度の大学改革の大変大きなマイナス点
が出てきてしまった、と考えざるを得ないのです。

大変陳腐な喩えですけれども、クレーンのようなもので考えますと、そのクレーンの土
台の部分がいわば文学部、基礎学に当たる部分であって、そのクレーンの腕木の部分、そ

れが応用学の部分であるだろうと思います。そして、その腕木の部分はどんどん先へ伸ばしていけるようになってなければ意味がない。ただしそのときに、釣り合った形で土台がしっかりしておりませんと、これは当然引っ繰り返るのは当たり前であります。その土台のコンクリート部分をすかさずにしてしまって、代わりに空き缶を詰め込むような土台にしてしまって、腕木だけを精一杯伸ばしてしまった。これはもう早晚引っ繰り返すことは目に見えております。現にもう大分傾きかけてきている。これは世界中と言ってもいいのかもしれないけれども、それに先駆けて日本の場合には特にそういう状況が顕著になってきています。

名称変更の 問題点

ですから、なおさらのこと、今ここで本当に考えなきゃいけないのは、その土台をしっかりするためにはどうすればいいか、そういう大学改革が行われるというのであれば、これはもうまことにもっともなことだと思えます。それが全く忘れられてしまった。組織いじりをし改編すればそれで何がしかのお金が目の前で若干増えるという、そこへつり込まれてしまった、というのが偽らざるところだったと思います。

しかし現場は、変えてはいけない部分というのは当然わかっているわけで我々皆言われなくてもそれはわかっているわけです。

中身は変えない、しかし変えないとお金はつかない、そんなら名前を変えて一見変わったように見せかけようという、そういう知恵をついつい出してしまった。それで、大蔵省も多分変わっているんだろうと思ってくれるだろう、と。今はそれで何とかしのいでいけていると思います。

ところが、これは絶対と言ってもいいんですけれども、恐らく 10 年、15 年たちますと、必ず中身は変わります。もう名前が変わっているわけですから、その名前にふさわしい中身にしないと、どこから見てもおかしい。第一、学生は変わった名前にふさわしい学問が行われているということを期待して来るわけです。にもかかわらず、名前とは違った中身であるとすれば、それは大学が率先して詐欺を働いているということになります。今の日本の大学は、かなりな部分でそういう詐欺をやっているというふうにしても少しも間違いはないだろうと私は思います。少なくとも九州大学に関して言えば、その変わった部分というのは明らかにこれは詐欺を承知でやったわけです。

もちろん中身の変わる前に、昔の名前に変えればいいんですけれど、しかしなかなかそうもいかないでしょうから、少なくとも 30 年ぐらいはやらなきゃしょうがないだろうと思います。いまさら言ってみても仕方のないことですが、しかし現実には私はそういうかなり危ない詐欺をやったなという気持ちで一杯であります。みずからかえりみて、大変恥ずかしい思いをしております。

それともう一つは、そうやって名前を変えたために、基礎的な学問であったものを一見応用学風に変えたということが非常に多くなりました。そのために、結局今現在起こってきている弊害は、そういう基礎学にかかわる大学のポストがもう完全に減ってしまいましたということです。ポストが減ったということは出口を塞いだということであり、研究者養成を我々はやってきたわけですが、真剣にそれはやってきたはずで

あります。そうやってつくり上げた未来の研究者、その研究者たちの卵のポストをいわばみずから潰してしまったという、非常に滑稽など言いますか、不思議なことをしてしまったわけです。

ですから、そういうときに最も重要なことは、現役教官が気がついたときに、できるだけ声を大にして訴えるということ、それがやはり一つの責任を果たす事柄でもあったわけです。ところが残念ながらそういうこともほとんど行われないうままに経過してしまった。その点非常に残念なことだったと思っております。

適正な 予算配分

ですから、そういうことが起きないためには、結局先ほども申しましたように予算配分の方式というものを、それをもう少し適正に、つまり文学部には文学部にふさわしい予算の配分方式、工学部には工学部的な、農学部には農学部にもふさわしい予算の配分方式というものが考えられていけば、こんなことはやる必要はほとんどなかったんだと思いますけれど、全部一律にやってしまった。

要するに大蔵省でも何でもとにかくスタンダードは一つでなければいかんというようなことで、これまでやってきてしまった。そういう非常に硬直化した予算配分という考え方がそもそも間違っているのです、そういうところを改革してくれという要求であるならば、まことにふさわしい大学改革、大学に対する予算のつけ方の改革というようなことで非常に意味があったとも思います。しかしそういうことも全く行われないうままに、そしてとにかく目の前のどこか変わったように見せかけようというような形があまりにも進んでしまった、というのが非常に残念なところだったと思います。

文学部の 使命

次に大学というところが何がやれるかということです。大学の有効性や有用性は一体何なのかということを考えますと、これもまた学部によって全然違うわけでありまして。ですから、この際は文学部ということで考えなければいけないわけですが、これは大学全体どこでもそうだと思いますが、要するに大学である以上、いい意味でのエリート教育をやるしかないはずだと思うんです。特に文学部などというところは、それを考えなければほかにやることはない。最近は高度な専門的知識を備えた社会人、職業人の養成をやるべきであるということになっておりますが、文学部でやれる高度な専門的知識を持った社会人、職業人というのは、まさに研究者養成ということに尽きるはずであります。

文学部で銀行員、商社マンとしての何かふさわしい事柄をやれるということは、恐らくほとんどどなたもお考えになってないんじゃないか。それぞれの学問の領域で、その学問の高度な知識、専門的知識を持った社会人、職業人をつくると言いますと、これは大学の先生というのが一番それにならな存在だろうと思っております。大学の先生は社会人、職業人として皆存在しているわけです。そして専門の高度な知識を持ったということになるわけです。ですから、高度な専門的知識を持った社会人、職業人を養成するということは、結局研究者養成ということと何ら齟齬するところはない。我々は今までそれをやってきた。岡山大学でももちろんそれをやってこられたはずであります。

全員が研究者、大学の先生になるのではないわけですから、当然高等学校の先生、あるいは商社マン、銀行員になる人もいるだろうと思っております。しかし、大学の先生になっても

いいような知識を備えた銀行員，商社マンがいても構わない。むしろそういう人が多く出るようにということだと思います。つまり，商社マンや銀行員もいつでも大学の先生になれるような，そういう高度な専門的知識を備えた人たちが社会を支えていくなれば立派な社会になるであろうということで，文部省もそういうスローガンを掲げたわけだと思います。

ですから，文学部でやれることは，まさにそのスローガンにもびったり合った人々を育てるといえることだと思います。そしてまた，大学の教官が学生に与えてやれることと言えば，恐らくそれしかないだろうと思えます。

そういうことをやるためにある文学部ということになりますと，おのずからやれることは決まっています。きちんと基礎的な学問を伝達する。そうはっきり目的を立ててまいりますと，これは要するに今までやってきたことを今までどおりにやればいいんだということです。それ以外には何も変わったことはありません。

研究と教育

ただし，そのときに一番大きな問題は，我々は研究と教育というその両面があるということです。個人としてはどうしても研究者の方にウエートを置いてしまうということは，これはもう当然だろうと思えます。また，そういうことがない限り，とてもやっていけるものではないと十二分にわかります。しかし一方で，どうしても教育ということが問題になってまいります。恐らく現在大学で一番大きな問題はここにあるだろうと思っております。今後の大学改革は，この面で特にどこまで知恵を出せるか，それがやはり大学としての生き方の一番重要なポイントになるのではないかと思っております。

つまり，研究はこれはもうあくまでもやはり個人的な営為でありまして，これは資質，境遇，環境，それにそぐえた形でその中でやれるだけのことをやる，それに尽きているだろうと思えます。そしてまた，文学部でやる研究，我々がやる研究ということに，社会的な有用性というようなものを求めようとしても，これは無理だと思います。もし文学部の研究に何か社会的な効用，そういうものをもし考えられるとすれば，それは，いわば一種の無用の用というものに大変な価値を認める方向に，社会がならない限りは無理なことであります。もし社会にそういう無用の用を評価しようという動きが出てきましたら，それこそ社会というものが成熟した証でもあるだろうと思えます。ですから，我々はやがてはこの社会が成熟するであろうということに望みをつなぎながら，それまでは認められなくても仕方がない，とにかく自分の好きなことをやり，そのやりたいことを本当に熱心に真剣にやるだけ，というのが我々の研究というものの置かれた運命だろうと思っております。

研究の場合はそれで大体諦めもつきますし，また望みもそこに尽きているだろうと思えます。ですから，研究に関してはもう何ら言う必要もないし，今の日本の大学の研究者の研究に対する姿勢というものは，もう全く疑う必要もない，危惧する必要もないと考えております。

特に教育の問題

しかし，一方の教育ということです。これはもう問題が山ほどあるだろうと思っております。その問題は，結局教育を受ける側の学生，要するに日本の若者と言った方がいいわけですが，その若者のいわば素質，性質，

そういうものが要するに我々が大学生であれば当然持っているであろうと誤解しております，まさに誤解なんですけれども，そういうふうに考えておりましたものと，現実とは大変にもう食い違ってしまったと，感じております。ですから，そういう学生に対して何が有効なのか。それをやはり模索させるを得ないというのが現状だと思います。

そのときにやはり一番我々が注意しなければいけないのは，学生のレベルが低くなった，その低くなった学生を何とか引っ張り上げるためには，まず学生のところまで下りて行って，そしてその学生が食いきやすいような餌を与えてやらなければいけない，これは当然だれもがそう思うわけですけれども，私はそこがやはり一番危ない部分でもあるだろうと思っております。

ではどういう方法があるのかと言われそうですが，実際私自身にも全く今のところはわかりません。しかしそこを考えるのが大学改革というものの一番大きなポイントだろうと思っております。岡山大学でどういうことをお考えになり，どういうことをおやりになるか，本当にそれぞれが模索せざるを得ない状況に現在なっていることはもう間違いのないわけであります。ですから，そこをやはりきっちり考えていく。そういうところに大学改革というものの知恵が働けば，これは本当に素晴らしいことだと私には思えます。

ただそのときに，とにかく文学再生であるとか，インターディシプリン(inter-discipline)というようなことばかりがささやかれるというのが，非常に危ないことだろうと私には思えます。

ディシプリンの重要性 我々の研究領域ですと，これはもうインターディシプリンは当たり前前のことであります。研究をやるのに，人よりも一歩でも二歩でも先へ行こうという研究をやる，そのときにインターディシプリンを考えない，狙わない，そういう研究なんていうのはあり得ないんじゃないかと思えます。私のような江戸文学などというまことに古臭い黴の生えたことをやっておりますも，完全なインターディシプリンであります。しかしインターディシプリンというのはディシプリン(discipline)あつてのインターディシプリンであるわけでありますから，ディシプリンを全く外してしまったインターなどというようなものはちょっと考えられません。

ですから，まずはディシプリンがあつて，そのディシプリンをきっちり身につけた人でないとインターということは考えられないのは当然のことだろうと思えます。それがまさに教育のレベルの問題だろうと思えます。ですから，私はその教育のレベルにおいては，そのディシプリンというものを絶対にきちんとそれをなぞっていかなければ，ちゃんとした教育はできるはずがないんだ，そのように思っております。

教育面でそのディシプリンを，今の学生は甘っちょろいから，何かもうちょっとこの辺に手を加えて，そして何だかわけのわからんものにして，それでうまく食いつかせよう，などというような発想が出てくるのが，一番こわいことなんじゃないかなと，今後のことを考えたときにそういうふうに思います。これはもうほとんど強制的と言ってもいいぐらいのディシプリンを実行しなければ，とても今の学生を伸ばしていくということはできないんじゃないかと思っております。しかしこれはまたいろいろそれぞれの領域で，それぞれの局面でいろんなやり方がもちろんあるだろうと思えます。ですから，そこをやはり知

恵を出すことだろうと思います。

教育のための 予算

先ほどの予算の問題でもそうです。大学の場合の予算が何に使われるかと言いますと、これはもちろん研究にも使われますけれども、国立大学が税金で行われている以上、その税金はやはり研究よりは絶対に教育に強く配分されるのは当たり前のことだろうと思います。文学部の学者の研究などというようなものはそんなに大した金がかかるわけじゃないんですから、自分の金でも大体はできる、そのぐらいに考えますけれども、それは人それぞれだろうと思います。

しかし教育という面では、絶対にそこにかかるお金は省いてはならない。そこへ税金の大半をつぎ込んで少しも構わないはずであります。従いまして、まさにその教育費としての予算配分ということを考えますならば、やはり正当な予算であれば要求するのは当たり前のことでありますのでそれを要求し、なおかつそれが不当に配分される場合には、やはりそれに対してもっと大きな声が出てくるべきだと思っております。

けれども、どうもなぜかそういう予算面になりますと、むしろ現行の予算配分方式に合わせたり、あるいはそれを先取りするというような形でしか知恵が出ないというのが、どうも我々の大変悲しいところでもあるだろうと思います。もちろんそういう知恵もあればあったに越したことはないんですけれども、やはり正しい適正な予算の要求というものをきっちりやらなければいざというところを、常に忘れるべきではないんじゃないかというふうにも考えております。

講座費と 科学研究費

その点でもう一つ、ちょっと最近の状況で心配なことを申しますと、科研費ということがあります。つまり科学研究費をとることがその大学の一つの格付けのようにまでなっております。それだけ科研費はどんどん広がっておりまして、金額的にも非常に伸びてきている。それは大変結構なことで

しかし私は科研費をとることによって、逆に講座費の方にすっかり神経が回らなくなってしまうというのが一番こわいんです。科研費はとればとるに越したことはないんです。いくらでもとった方がいい。しかし、科研費さえとれば講座費は余りなくてもいいというようなそういう感覚が蔓延してしまうと、これは大変なことになるだろうと思います。

この科研費が今の恐らく10倍ぐらいになりましたら、確かに我々は個人の研究はそれでやった上で、さらに余りのものを教育費として、講座に積み上げていくということになると思います。けれども、とてもそこまでは伸びるはずはないと思いますので、科研費はしよせん個人研究費にすぎないと思います。

そうすると、当然教育費というものは、まさに今申し上げましたような講座費、その講座費としての積み上げ、講座費として書籍を積み上げていくということです。それ以外には恐らく、文学部の教育ということに関する限りあり得ないんじゃないか。講座費というのはまさにそのためのものでありますので、そういうものをきちんととることによって、学問を継承していく研究者を養成するための必要な図書を備えるということ、それ以外に恐らく我々のやる仕事はないんじゃないかというふうにさえ思います。

知識への 尊敬

そしてもう一つは、先ほどから申しておりますように、とにかく学生の質が変わってしまってきております。最近考えますのは、今の学生は、要するに知識というものに対する尊敬が最も薄れてしまったと思えます。我々が学生と対応しまして、人格的に彼らに尊敬してもらおうとはとても思いません。またそういう人格ではないことは重々承知しております。しかし、彼らがもし私どもに対して尊敬を払える部分というのは、まさに知識の面しかないだろうと思えます。その知識を愛すること、そしてその知識を蓄えた人に対する、あるいはその知識そのものに対する尊敬の念、そういうものが完全に変わってしまってきた現在の学生、そういう学生に対してそれを回復させるにはどうすればいいかが、教育面に関して考えなければならぬ一番大きなポイントであるだろうと思っております。

ですから、その点を今後はぜひ積極的に考え、そしてそれにふさわしいカリキュラム改革、それがまさに大学改革の一番大きな成果というものになるんじゃないかというふうにも考えてもおります。

筆頭学部 ・文学部

そういうことで、ほかにも何かいろいろと考えることはありますけれども、特別にお話しするような事柄としては今のところまだ頭の中でまとまりません。ただ最後に申し上げておきたいのは、文学部というものの位置であります。

工学部、医学部、農学部、薬学部、その他もろもろの学部がなくても、総合大学で少しも構いません。しかし、文学部というものがない総合大学というのは恐らくあり得ないんじゃないかと思えます。

そしてまた総合大学と言われる大学で、その筆頭学部というのが昔から決まっております。これは先ほど伺いましたら文部省令で決まっているんだそうですけれども、そのくらい大昔から決まっておりますように、筆頭学部というのは文学部であります。

ですから、文学部はそういうところだということを、やはりもっと誇りを持っていただいて少しも構わない。文学部が何よりも頭にどんと座っていて初めて岡山大学が岡山大学たり得るんだと。

そして、文学部というところ自体が総合大学なんですね。これはもう常日頃おわかりだと思えますけれども、文学部ぐらいあらゆる学問がここに重って存在している、それこそ文系、理系、社会学系、あらゆるものがその文学部の中にちゃんと包摂してある、だからこそ文学部というのが基礎学として存在し得る非常に大きな理由でもあるだろうと思えます。ですから、例えば、本当に文学部の第三者評価をやるとすると、恐らく講座の数が20あるとすれば20人の評価委員が当然必要だろうと思えます。つまりそのぐらいに総合的にでき上がっている学部です。それがあって、そしてその周辺にいろんな学部があるというのが大学というところの当然の姿でもあるんです。

元気な 文学部

それが最近ではどうも工学部や医学部の方が筆頭学部であるかのように世間でも思われてしまっているというところに、やはり文学部というものの持つ苦しさと言いますか、現在の現状と言いますか、そういうものが何となく伺われて浮き彫りになってしまった。

世間がそう思っているだけならまだいいんですけども、だんだんに文学部の中の先生方まで何となくそういうふうにはっきりとなってしまうというのが、これがまた大変つらいところでもありまして、ですから、とにかく文学部というところは、これがなければ岡山大学はあり得ないんだという、そこまでひとつ元気を出していただきたい。そうやって元気が出てきますと、おのずから学生にもその元気が伝わって、そして自然にまた文学部というところを世間もまた認知するというに当然なってもくるはずです。

どうかその辺のところをお酌み取りいただきまして、皆さん方にぜひ倍旧の元気を出していただきたいと切にお願いする次第であります。

どうもありがとうございました。

あ と が き

昨年5月の教授会で、自己評価とともに外部評価を実施することが決まりました。

文学部独自の外部評価は初めてのことであり、最初から手探りの状態でした。とりあえず各学科幹事に集まっていたいただき、外部評価とは何かということから考え始めました。7月まで各学科には、無きに等しい予算のもとで、適切かつ最高の評価委員の選定という困難な命題に取り組んでもらいました。多くの教官の奔走により、それぞれの学問領域において最高の水準にある方々、しかもどなたもがその長として学部運営の経験者という、私たちの願い以上の方々が委員を引き受けてくださいました。

9月、『自己点検・評価報告書：1999』の刊行と同時に、他の文学部関係資料とともに各委員にお送りし、検討をお願いしました。その際こちらで考えた評価項目をお伝えし評価をお願いしたい重点都分を示しました。また厳しい評価をお願いするとともに、ぜひともそれぞれについて有効な打開策、ご提案をいただけるようお願い申し上げます。それははじめての外部評価を受ける私たちの基本姿勢でもありました。現状をありのままに認識し、課題の軽重を的確にはかり、以て改革実現の手段を探ろうとする意志からでした。

結果、本報告書に見られるとおり、具体的かつ率直なご指摘を数多くいただくとともに、それに倍する、深い見識から発せられたご提言のかずかずを頂戴しました。各委員の講評時における厳しい問題指摘を伺うときの緊張感、問題解決のための提言を伺ったときの感動は、今も深く印象されております。

短期間かつ手探りの外部評価であったために、様々至らぬ点がありました。まずは評価委員の5人の先生方に、ずいぶんご無理を申し上げたことをお詫びしたいと存じます。たとえば、今回の外部評価の方法についても具体的なお批判をいただきました(森委員)。指摘されて初めて気がつくことでした。これも今後の機会に生かすべき貴重な御提言と受け止めております。委員のみなさまから私たちは計り知れない知恵を豊かにいただいた思いです。心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、格別のご努力をいただいた本年度の各学科幹事(外部評価委員以外では、成田常雄教授、竹島あゆみ助教授、中尾知代助教授、永田諒一教授、岩松正洋教授)および、終始ご支援いただいた自己評価委員長小林孝行教授に、深謝いたします。また実施準備から本報告書の刊行まで、十全のご配慮をくださった事務の方々にお礼申し上げます。

本報告書が来るべき改組にどれほど資することができるか、次回の外部評価までに、どれだけのことが達成されているか、期するところ大いなるものがあります。

2000年1月

岡山大学文学部外部評価委員会

渡 邊 護 (委員長)
稲 村 秀 一 (人間学科)
田 中 共 子 (行動科学科)
加 治 敏 之 (歴史文化学科)
和 田 道 夫 (言語文化学科)
江 口 泰 生 (言語文化学科)

岡山大学文学部

外部評価報告書：1999

2000（平成12）年1月31日発行

編集 岡山大学文学部外部評価委員会

発行者 岡山大学文学部

〒700-8530 岡山市津島中三丁目1番1号

TEL 086-252-1111

FAX 086-255-9903

印刷所 株式会社三浦印刷所

岡山市奥田一丁目4番7号



岡山大学

岡山大学文学部
外部評価委員会